いしかり潛

石狩市民図書館所蔵兵部省文書を読む ……田岡　克介…1

石狩尚古社資料館の資料から ……中島　勝久…4

三平汁と石狩鍋 ……吉岡　玉吉…8

北千島サケ・マス流し網漁めしたき物語
—北千島占守島長崎港を基地として— ……吉岡　玉吉…13

第 19 号

石狩市郷土研究会

石狩市民図書館所蔵兵部省文書を読む

田岡克介

市民図書館所蔵兵部省文書は、蝦夷地から北海道へ、幕末から明治草創期へと移り変わる混沌とした時代を伺い知ることができ、且つ、僅か五カ月と短命に終わった兵部省出張石狩役所の数少ない貴重な文書である。

新兵衛

昨辰年賊徒

襲来人心多

半其勢滔二委

靡致砌正義ヲ

守候次第寄特

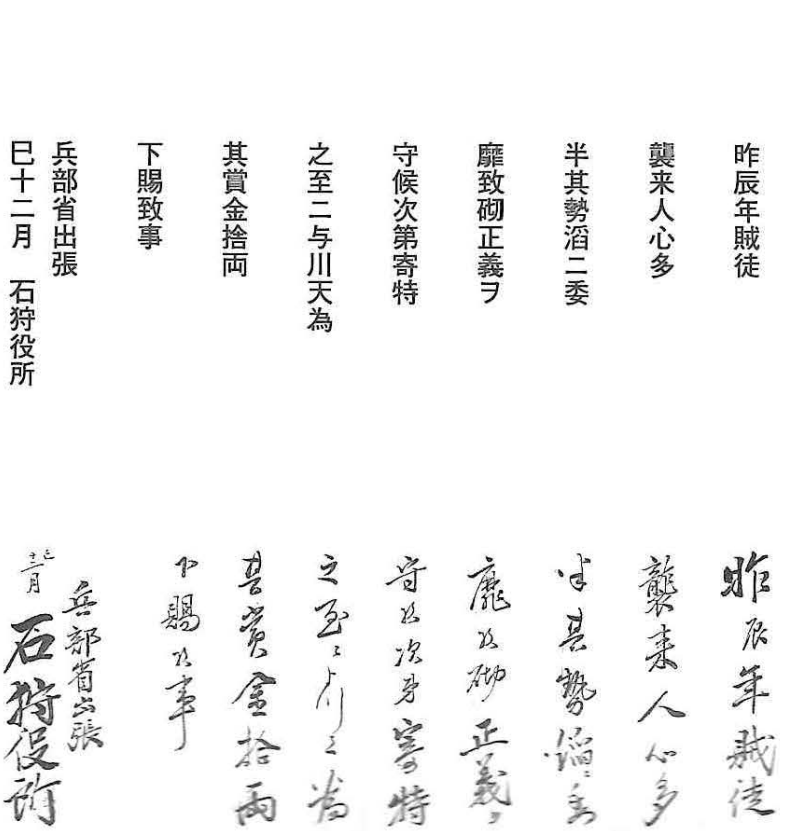
之至二与川天為

其賞金捨両

下賜致事

兵部省出張

巳十二月　石狩役所



先ず最初に、この文書が記された時代背景を見ると、慶応三（一八六七）年大政奉還、同年十二月、王政復古の大号令により明治新政府の成立を見るが、世は未だ不安定で、その中にあって石狩も時代の影響を大きく受け、翻弄されることとなった。

慶応四（一八六八）年四月、新政府の蝦夷統治組織として函館府が設置されたものの、本格的蝦夷地経営に着手するにはなお若干の時間を費やすこととなった。その要因は同年十月、幕府脱走軍の榎本武揚率いる艦隊の一行が鷲の木に上陸、十二月には五稜郭に蝦夷島政権を成立させたことにある。同時に石狩においても七月、旧幕府石狩詰調役樋野恵助から新政府軍務官井上弥吉が受継ぎ、経営にあたっていたが、函館戦争の影響を受けるとともに、石狩役所の多くが旧幕府方の役人構成でもあったことから、井上弥吉は十一月にはついに石狩を離れ、銭函山中の杣小屋に逃れ越年するなど、新政府の統治は未だ及ぶところではなかった。

翌年三月、井上弥吉は小樽港から脱出、青森にて新政府軍に合流、四月には反転五稜郭の戦いに参戦するなど、歴史は大きく動き出し、五月に清水谷総督らが再度函館に上陸、ここに改めて北海道経営が本格的に着手されることになった。

この時、石狩では六月に松前藩一隊が派遣され、その後八月には会津藩降伏の移住先として選定されたこともあり、石狩、高島、小樽の三郡が兵部省の支配下となり、井上弥吉は兵部大録として再赴任するに至った。

井上は石狩経営にあたりながら、会津藩降伏人の移住の準備に入るが、同時に北海道全体の経営にあたっていた開拓使との間に確執が発生した。石狩は兵部省の地にあってその後の浮沈をも制する歴史の渦の中にあった。

文書の内容は、兵部省石狩役所より町方役人の年寄新兵衛に対し、

旧幕府軍による函館戦争勃発の際、町方役人としての働きに対し、褒賞金を下賜した際の添文である。記述の時代背景を読むと、「昨辰年賊徒襲来」とは、辰年即ち明治元年に函館戦争を引き起こした榎本武揚率いる旧幕府軍を指しており、榎本軍百五十名程が小樽に上陸。石狩には二～三十人兵を配しており、この時既述の井上弥吉が石狩脱出に至った経緯もあり、皇軍に反旗を翻すばかりか、井上弥吉の感情をも読み取れる「賊徒襲来」と記すに至ったと想像する。

この時、賊軍の勢いに怯える町方をまとめた町方役人年寄新兵衛の働きは大変立派なことであるとして、その行いを讃え、金十両を遣わすと兵部省が発行したもので、そこには当然井上弥吉の存在があることは想像に難くない。

この文書を市民図書館の清水司書から解読依頼を受けた際、「兵部省出張石狩役所　巳十二月」の文字を見て、市民図書館が開設され、確かな感性と専門性を有する司書職員が、この文書を百数十年を費やし、再び石狩の地に呼び戻してくれたものだと柄にもなく感傷に耽ったものです。

事実、兵部省石狩出張所は、明治二年八月に開設され、僅か五ヶ月後の翌三年一月には開拓使に移管されており、この間の数少ない文書を所蔵することは、石狩市にとって極めて意義深いものがある。

また、兵部省大録井上弥吉（熊野九郎）は田中實氏の長年にわたる研究により、その姿が解かれつつあり、「北海道史研究会－北の晴嵐二七号」に発表されているほか、私の市民図書館講座講演の際、八幡神社境内建立の献燈に際しての史料、年譜をお寄せいただくなど、井上弥吉に関することは田中實氏の研究から大部分を引用させていただいております。

「井上弥吉年譜」

天保十四	（一八四三）年	長州長田村で誕生
元治元	（一八六四）年	久坂玄瑞に従って蛤御門に戦う
明治元年	（一八六八）年	明治新政府軍務官として石狩主宰となる
明治二年	（一八六九）年	青森脱出後政府軍に加わり五稜郭で戦う 兵部大録として石狩へ再赴任
明治三	（一八七〇）年	開拓使に引継ぎ、石狩を去る
明治五	（一八七二）年	石川県大書記官
明治十四	（一八八一）年	大蔵省書記官従六位
明治二一	（一八八八）年	退官
大正八	（一九一九）年	山口町議会議員
大正九	（一九二〇）年	石狩来訪、八幡神社奉献御神燈悼石となる記念碑（木戸孝允参議官）の建立を知り、神社に金五十円と来国光を奉納する。
昭和二	（一九二七）年	享年八五歳で死去

（田中實氏作成年譜を抜粋）

新兵衛は、石狩町方役人で、開拓使石狩往復文書にたびたびその名が現れるが、明治四年六月二十八日の「書面之趣取調候處事實相違無之候間願之通御聞取相成可然哉此段奉伺候也」「乍恐以書付奉嘆願候」の願人筆頭に高橋新兵衛として、始めて名氏を伴った名を見ることができる。百姓代土田宇兵衛、名主岩田甚兵衛とともに、この時代の町方役人として、様々な活躍の程が読み取れるものである。また文書中の金十両は、他の褒賞金の例からして、一般的であったと推察するが、下賜金は新政府として統治を始めて新政府の町方への気遣いをなすもので、その後もたびたび行われている。

記

一、弐拾両

右者札幌御用達御免被仰是迄

骨折相勤候ニ付為御手賞被下置難有

奉以載候以上

正月二廿八　土田宇兵衛

この例を見ると、金十両から二十両の下賜金が町方に払われており、町方の存在は兵部省、開拓使のいずれにとっても大きなものであったのであろう。

明治草創期における北海道経営の一翼として石狩が、歴史に刻み込まれていく興味深い時代であり、一枚の文書が人間の幾重にも重なった行為を今に伝えてくれる実に楽しい文書である。

参考資料

田中實資料（年表－井上弥吉年譜）

新北海道、小樽市史、石狩町誌（上）、開拓使往復文書（二冊）

石狩尚古社資料館の資料から

中島勝久

《一》

その日は石狩特有の強い風が吹いていた。平成五年七月二十九日、日本伝統俳句協会副会長の伊藤柏翠氏が、石狩尚古社資料館（以下尚古社）にお出でになった。先生はホトトギス派の同人で福井県福井市に在住。同派で、札幌市在住の大島早苗氏ほか数名の女性たちも、ご一緒であった。札幌市で開かれた句会終了後に石狩へ足をのばし、石狩灯台付近を散策。俳句を詠まれた後に、当尚古社へ寄られたとのことであった。

柏翠氏は、尚古社に展示してある俳句などの資料集を熱心にご覧になり、「これだけ多くのものを、よく残しておられましたね」と、いわれた。また石狩が、かつて俳句活動が活発であったことにも、関心をもたれた様子だった。一階の展示場から二階へ移動する際に、階段をのぼるため同行者の手をかりるほどの高齢であったが、俳句関係の展示品を閲覧する意欲には並々ならぬものがあった。柏翠氏は、二階の展示品をご覧になった時、ひとつの品に目をとめた。それは、伊東祐亨（すけゆき・ゆうこうとも呼ぶ）が揮毫（きごう）した書であった。伊東祐亨は、柏翠氏の親戚の人であるといわれ、感激しておられた。

その書は、漢詩の横書きで、「萬古清風」とあり「明治三十一年　為中島君　祐亨」の署名がある。私の以前の家（昭和四十四年取り壊し）の、奥の間に掛けられたものであった。

中島あての為書きからすると、本人に直接会ったうえでの揮毫、とみていいだろう。と、すると、明治三十一年に伊東祐亨は、どのような理由で石狩を来訪したのだろうか。それは公的なものだったのか、私的なものだったのかは現在不明である。

伊東祐亨は、別号を碧海（へきかい）といい、薩摩藩士であった祐典の四男として生まれた。以下、その略歴である。

一八四三～一九一四（天保十四年生まれ。大正三年没）

明治期の海軍軍人。海軍操練所で航海術を学び、薩摩と英国の戦争に参加。維新後、春日と日進などの艦長となり、以後一八九二年中将、横須賀鎮守府長官。日清戦争時には連合艦隊司令官、九五年軍令部長、九八年大将、日露戦争時には大本営幕僚長を歴任し、一九〇六年元帥。一九〇七年に伯爵。海軍の重鎮でかつ薩摩閥の長老として強い影響力をもった。

（『世界大百科辞典』より）

なお、尚古社に来館した伊東柏翠氏の略歴は、次の通りである。

明治四十四年五月一日に東京で生まれた。昭和十一年に高濱虚子（たかはまきょし）に師事。俳誌『ホトトギス』同人。俳誌『花鳥』を主宰。句集『虹』、日本伝統俳句協会副会長。国際俳句交流会副会長、FM福井放送株式会社取締役、ホトトギス同人、福井市在住。石狩来訪どきの年齢は八十三歳である。

柏翠氏が石狩に来られたのは、平成五年のときが初めてと聞く。帰られてから、石狩にちなんだ俳句を詠まれただろうか。興味はつきない。北海道には度々来られたようで、道内には広尾町と弟子屈町、音更町の三ヵ所に句碑が建立されている。『北海道の碑』（東延江著）によれば、次の句が刻まれている。

還らざるものを霧笛の呼ぶ如し
建立　昭和五十五年六月十三日
所在地　広尾町シーサイドパーク

摩周湖は涼し太古の色のまま
建立　昭和五十三年十月
所在地　弟子屈町鐺別（とうべつ）温泉・萩の家旅館前

千年の楡とこしへの月の温泉
建立　昭和五十九年九月二十三日
所在地　音更町十勝川温泉・ホテル観月前

また、柏翠氏は略歴にもあるように、高濱虚子より俳句を師事されたこともあり、「ホトトギス」と深い関わりのある方である。ホトトギスを主宰した高浜年尾（明治三十三年～昭和五十四年）は、虚子の子息で一九九五年に『高濱年尾全集』を上梓している。その栞には、別刷で「全集を世に問う日来し」という文を、伊藤柏翠氏が寄せていることからも、それがわかる。

俳誌『ホトトギス』は、明治三十年松山市で柳原極堂が創刊。極堂は、俳句を同郷の正岡子規から学んだ。高濱虚子、高濱年尾と引き継がれ、現在は年尾の次女である稲畑汀子が主宰している。創刊以来、百年の歴史があり花鳥諷詠の伝統を構築している。

先に述べたように、柏翠氏が石狩を詠んだ俳句を私は現在、知ることができないが、高濱年尾は、幾度か石狩を訪れ「石狩」を詠んだ句がある。全集第一巻に掲載されているもので、次のような俳句である。

石狩の麦漸くに伸びて初夏　（昭和十四年）
玫瑰（はまなす）の実の朱けきになほ花つづけ　（昭和二十五年）
鮭漁期控へ石狩訪ふ人等　（昭和四十年）
玫瑰の砂丘外れてキャンプせり　（昭和四十年）
玫瑰や石狩河口水平ら　（昭和四十年）
灯台のほとり夏野も放牧す　（昭和四十年）

尚古社館内に展示している漢詩「萬古清風」。それを揮毫した伊東祐亨とホトトギスに所属する俳人の伊藤柏翠との関係。ホトトギスを主宰した高濱虚子の子、年尾と伊藤柏翠高濱年尾が石狩を詠んだ俳句。

一枚の書からは、巡りめぐって、ひとつのドラマが生まれる。……萬古（ばんこ）。遠い昔から永久に続く時間の流れは、思いがけない人との結びつきを私たちに提供してくれる。

《二》

北海道の母なる石狩川の河口の地、石狩に、幕末から昭和十年代まで約八十有余年継いだ俳句結社「石狩尚古社」があり、明治期道央俳壇として全国に名が知られていた。

その尚古社の俳句史において、残された資料から、親子二代にわたり選者を勤めた俳人がいた。

その俳人の名は、勝峰錦風と勝峰普風である。錦風は明治期、北海道で活躍した人であり、子の普風は全国的に知られた俳人である。勝峰錦風が尚古社の選者として出てくるのは、明治三十五年より大正七年以降、東京に転居した大正十三年頃まで続けていた。また、錦風は明治期、小樽新聞の俳壇の選者をしていた。さらに、狂人的でもあり、

岩内新報に川柳（狂句）の解説を掲載しており、北海道川柳の原点でないかともいわれている。

『俳諧一夕話』
俳暦（明治三十四年五月二十九日北海道毎日新聞）
後志国岩内郡鷹台町
北海道俳諧三大家　勝峰錦風

『俳句と點取』（明治三十三年二月北海道毎日新聞）
『俳諧の連歌の就いて』（明治三十四年二月北海道毎日新聞）
『連句の附味』（明治三十五年二月北海タイムス）
『我が俳諧』（明治三十八年二月北海タイムス）
『俳句の姿情』（明治三十九年六月小樽新聞）
『俳句の初心者』（明治四十年二月岩内新聞）
『連座の花』（明治三十九年五月北海時事）
『俳諧浮世眼鏡』（明治三十六年二月北海タイムス）
『続俳諧浮世眼鏡』（明治三十六年五月北海タイムス）
『狂句ばなし』（明治三十八年七月岩内新聞）
『狂句の表裏』（明治三十九年一月岩内新聞）
（『俳諧風交録』より）

岩内・勝壮菴錦風詞宗撰　時鳥の巻
尚古社追善集
思無邪　岩内勝荘庵

三光

海山と雲は分かれてほととぎす　石狩松山
泣く石もありと聞きしに郭公　東京水道山
時鳥雲にものぞみある夜哉　瀧川泉蕚

追加

蜀魂一樹のかえのえたしかも　判者錦風

（明治三十五年『尚古集』より）

思無邪　東京勝荘庵宗匠

感吟

おちむとして斜に長し雁の線　三徳
板や秋晴の日のながかれと　以蕉
長老の座禅終われば一葉かな　瓢斉

（大正十三年尚古社選）前川道寛『石狩俳壇誌』より

勝峰錦風の俳歴は、明治三十四年五月二十九日北海道新聞に掲載された。

〈錦風、本名平田金治。慶応二年旧幕木材蔵同心平田善政の三男として江戸本所緑町に生まれる。幼名金之助、金造、金治と改める。明治十九年に亡勝峰仁保の名跡を継ぐ。同二十年、牛込矢来町三番地に米穀商を開店、小石川開口にて水車業を兼営する。同二十五年、北海道岩内町転住、醤油醸造業を営む。大正五年小樽区色内町に転任、米穀委託販売業を営む。俳諧は二十歳頃から俳句に志を立て、この間、東京都において議論家を以て目せらるる所の三世夜壮庵宗匠に師事し、又大夢庵千畝・一具庵尋香老輩と比肩して連歌の大家と称せられたる故、十一世其日庵宗匠の客弟として連句百韻を学び加えるに博識家を

以て知られる所の五世東杵庵蔦斉宗匠に従って、正風の俳句連歌とも教えを受け、其餘暇には有名な各宗匠を歴訪して道を尋ね疑を質し、専心一意研究錬磨に従事し、東都俳入門に牛込の錦風として名を知られた。

錦風、二十七歳で北海道岩内に移住。本道において、業は益々繁栄に趣き俳句は愈々共妙を極む。岩内に明治二十五年文友会を起こしその指導に当たり、全道に名声高く、全道各地の俳諧指導に当たる。錦風会員多く、北海道俳諧三大家に称された。明治三十四年以来、新聞紙上に俳諧論を多く掲載している。

俳号勝荘庵錦風。旧号化州。別号梅の家かおる。自在山人。大正七年十一月、小樽区より『俳家風交録』発刊。当時の本道俳人四百二十名余りの名が掲載。錦風は、大正七年以降小樽より東京に転居しているが不詳〉。

石狩尚古社の選者として大正十三年頃より勝峰普風が出てくるが、普風は勝峰錦風の息子であるが、全国的に名のとおった俳人である。石狩に残る普風の選は次のとおりである。

春光遅々　普風選

（大正十五年）

丙　寅　三　月

秀　句

初日の出川面にひろく澄みにけり　小坡
初荷旗影さす河の松の内　八洲
月あれは雲はれは瞳々成　志風
恋猫のやつれて覗く手桶かな　芳翠
川面の清きに雲の動きけり　池菱

東　京　勝峰普風先生選

三光

秋晴や社家の前なる居合抜　瓢斉
初潮や廻廊の柱影映る　三徳
さすらひの長きになれて砧の夜　池菱

勝峰普風は本名普三。以下略歴である。

〈勝峰金治（俳号錦風）の長男として、明治二十年（一八八七）十二月十一日東京市牛込区矢来町に生まれる。別号抱天居。同四十三年東洋大学卒業後、小樽新聞の記者になったが、間もなく上京。報知新聞、万朝報、時事新報などの記者を十五年間勤める。俳諧は十六歳の頃から父錦風に学び、更に伊藤松宇の教えを受け関東大震災（大正十二年）で松宇が故山に引き上げるについて『にひはり』を引受け経営したことがある。大正十三年に北海道へ来遊し各地を巡った。大正十五年『黄橙』を創刊主宰した。

また、法政大学で俳諧史及び蕉門の俳論を講義した。最も大きな業績は『日本俳書大系』全十七巻を大正十五年から三年間で刊行したことにある。このほかの著書に『明治俳諧釈』『其角全集』その他古俳諧の復刻、編著が多い。昭和二十九年（一九五四）一月三十一日埼玉県桶川町の居で没。享年六十八歳。大正七年父錦風が小樽で刊行した『北海道俳家風交録』の校訂者が普風である〉

三平汁と石狩鍋

吉岡玉吉

石狩鍋を語るには歴史の古い三平汁やドンガラ汁から記さなければならない。

一　三平汁の歴史とその由来

三平汁は魚に塩をふって数日おいたものに野菜を加えて塩味で煮上げた汁ものを一般では言われているが、由来は石狩鍋と同じように様々に伝えられている。

広辞苑では「創案者の名という。塩鮭の頭を薄く切り、じゃがいも、大根などを加えた酒粕汁（東北、北海道でいう）」となっているが、石狩、厚田では春ニシンを漬けた「すしニシン（糠鰊）」を具にした塩味汁を主に言っていた。

極めてシンプルに一昼夜位塩抜き（そのまま水洗いしたものでよい）し、頭を取り五分一位にし、鍋に水を張って昆布だしで、五升薯、大根、乾燥させた大根葉（水にひたしたもの）を加え、塩味で味を整えて食べるのがベストであった。酒粕を入れるのは昭和十（一九三五）年代で贅沢な食べ方だった。当時、石狩市本町地区では、「すしニシン」の三平汁の他に、アキアジのドンガラを主とした三平汁がよく食べられていた。

石狩産のアキアジでは、新巻の尾の部分とドンガラ、塩引きで作るのが一般的であった。

昭和十（一九三五）年代では、北千島鮭鱒漁の贈答、サケ・マスの塩引きで秋から冬にかけて塩味で野菜（五升薯、大根、白菜またはキャベツか玉ねぎなど）を加えて食べた。

ニシンの場合も、アキアジの場合も、半年から一年近くねかせたものが独特な味が出て、特に五升薯、大根に染みると忘れられない味となる。

筆者は、三平汁の具はあくまでもニシン、アキアジでなければならない。ニシンは米糠塩で漬けオモシをしてねかせる。アキアジは、内臓を取り、身体のウロコを逆撫でして塩をまぶして「山漬け」してねかせると乳酸発酵し特別な芳香、風味と防腐力が出る。だから、ニシン・サケを使わなければ本物の三平汁とは思わない。

タラとかカジカなどの汁は「タラ鍋」とか「カジカ鍋」で「三平汁モドキ」といいたい。

さて、「三平汁」の名の由来であるが、

その一、奥尻島の漁夫―三平から松前藩の賄い斎藤三平に伝わり、殿様にニシンの魚汁を食べさせて珍重がられてその名を付けて三平汁となった。

その二、アイヌ語のサンペオハウ（サンペは心臓　オハウは汁）が和語に変化して三平汁となった。

その三、有田焼の創始者、朝鮮から帰化した李参平の作った独創的な皿が三平皿となって伝わり、この皿で食べたことによって三平汁となった。

その四、天保年間（一八三一～三九）の古書の中に「料理の根本はカツオ・みりん・食塩もしくはしょうゆの三つだが、三平汁はこの三つを使わなくとも美味なので三配汁と呼び、この音がなまって三平汁になった」というくだりがある。しかし、文献からいうと、三平汁はもっとさかのぼると天明八年（一七八八）えぞ地を訪問した菅江真澄は述べている。

注、山漬け
サケの塩蔵過程で、捌いたサケに塩を振り（ウロコにも逆撫でして塩をまぶす）一列ごとに互い違い並べ積み上げてゆき、塩ムシロで囲う、一週間位したら手返しする。
サケの塩漬けの一種で冷凍技術のない時代盛んに行われていた。積み上げてねかせること（発酵）によって甘味が出る貯蔵法であった。

注、菅江真澄
江戸後期の旅行家、民族学者、三河（愛知県の東部）の人。本名　白井秀雄。
田中道麿に国学を学び、信濃（長野県）東北、北海道を遊歴、その紀行を「真澄遊覧記」という。一七五四～一八二九年（宝暦四年～文政一二年）七五才で没。

二　石狩鍋の歴史　台（大）鍋―三平汁―ドンガラ汁―アキアジ鍋（サケ鍋）―石狩鍋。

「石狩鍋」と言われるアキアジ鍋（サケ鍋）の歴史は、台（大）鍋（鰊『すしニシン』又は鮭『塩引き』を適度に切り、五升薯、ダイコン、ホシナなど入れ昆布だし、塩味による水炊き風の鍋）がその原形である。

宝永三（一七〇六）年、今から三〇〇年前、能登の人村山伝兵衛（伝太夫）が石狩に来て初めて網を使って鮭を獲ったころに石狩の人が味噌を使ってアキアジ汁を作って食べたとも言われる。

また、江戸時代（明治二『一八六九』年以前）アイヌの人々の鍋汁のサンペオハウ（サンペは心臓、オハウは汁『サンペ汁』）にも見ることが出来る。

江戸時代から明治にかけての漁師は漁期中はもとより、この台（大）鍋は主食に匹敵するもので、料理というものではなく当然の食べ物であり、調味料は味噌、醤油より塩味が主体で酒粕が出回るようになって北海道各地で食べられるようになった。

漁師の間では調味料を味噌味にすることは、特に魚に対する場合、「ミソをつける」（失敗する、損をする）といって忌み嫌い禁食したものである。例えば、魚の味噌漬けなど絶対ダメであった。

しかし、漁師以外の家庭や食堂、料理店ではこの台（大）鍋を変化させて人々の好む料理が出来ないかと試行錯誤して味噌汁味にしたアキアジ鍋を作って来客に提供してみた。ところが魚の生臭さが味噌味で打ち消され、それが意外にも受け、特に昭和二十（一九四五）年以降、石狩浜に鮭漁見物に来る観光客にサケ鍋（アキアジ鍋）として絶賛されるようになった。

注、昭和十年代でも八月頃に海浜学校があり、札幌市から一〇〇人程度の児童がお寺（能量寺・曹源寺・金龍寺）に一週間位の予定で宿泊した。この間、浜鍋やら、アキアジ鍋の献立もあった。札幌の子はサケ鍋、石狩の子はアキアジ鍋といった。

戦争が終って平和な時代になったが食糧不足。といっても心の安らぎ安堵の場を求めて石狩浜の静寂にひたりながら鮭漁を見物しこのアキアジ鍋に舌鼓を打って帰る人が多くなった。

これが評判になって漁期にはツアーを組んで入り込み、それが人々によってアキアジ鍋がサケ鍋となり、延いては「石狩鍋」へと変化していったと考えられる。

「石狩鍋」の名が有名になったところから、巷では「発祥はどこだ」「誰が名付け親だ」を騒ぎ出した。あっち、こっちで「やれ俺がつけ

た」「いや、わしの店が元祖だ」「そうでね、新聞記者だ」と交々。元祖は鮭漁を見物に来てアキアジ鍋を食べた観光客が味噌仕立の台（大）鍋（鍋料理）を食べ「石狩に行ってサケ鍋を食べて来た」「石狩のサケ鍋は美味」「石狩にサケ鍋を食べに行こう」と評判になって、いつしか観光客の間に「石狩鍋」の愛称が生れたとも推定される。

余談になるが、昭和五八（一九八三）年九州に旅行し雲仙の旅館に宿をとった。世話してくれた仲居さんが「北海道は何処ですか？」と聞くので「石狩という町です」と答えると即座に「石狩鍋が有名ですね」という。「石狩川」位が出てくるのかと思っていたら、九州の雲仙で石狩鍋が出るとは、驚くやら優越を感じた次第。

石狩市の名は石狩川と共に全国に知られており、河口の街、そして鮭の獲れる浜として昭和中期頃まで有名だった。

この様なところから観光客ばかりでなく多くの来町者が味噌仕立の鮭の鍋料理を食べ、独特の味わいからこの名が付けられたものと推断する。しかし、本町地区（親船町）の料理店（金村田彌五郎）が昭和二十（1945）年代初期から最も多く味噌仕立のアキアジ鍋を観光客に提供していたことから広く知られるようになったことは確かである。

三　石狩鍋（アキアジ鍋）の変遷

ア、明治末期～大正時代

呼称　台鍋～ドンガラ鍋～アキアジ鍋

主に三平汁の変化したもので、アキアジの成魚は使わずピンコ（一尺六寸以下）メートル法では、四八センチ以下か、鮮度の落ちた慣れサケか、正月などで身卸ししたドンガラ（粗）を塩味で作ったドンガラ汁であった。

素材　生鮭はほとんど使わず、塩鮭、新巻のドンガラと尾の部分。野菜（五升薯、ダイコン、にんじん、ハッパ「ダイコンの葉」、ねぎなど。を入れ昆布だしの塩味で炊き上げるものを台鍋と言った。ドンガラのみではドンガラ汁、それに身が入るとアキアジ鍋と言った。

漁師の家では魚類は味噌味で食べなかった。街の人（漁師以外の人）は味噌味でも魚を食べていた。　故、吉岡タソ　慶応四年生の話

イ、昭和十（一九三五）年代

注、この頃でも漁師の家庭では魚類の味噌料理は法度だった。また、祝事など以外成魚は食べず生きの下がったアキアジなどを捌き具にした。

呼称　台鍋、ドンガラ汁、三平汁、アキアジ鍋

素材、ドンガラ（頭、骨、内臓、通称　粗）

サケの切り身（ドンガラに入れるとアキアジ鍋）

野菜（ダイコン、ニンジン、キャベツ、玉ネギ、長ネギなど）

酒粕。

作り方、サケを身卸してぶつ切り、内臓とダイコン、ニンジンはイチョウ切り、玉ネギ、鍋に昆布を敷き、塩味でだし汁を入れて煮立ったらサケのぶつ切り、内臓を入れ煮立ったら酒粕を適宜に加え、味をととのえて長ねぎを入れて出来上がり。

漁師以外の家では味噌味で作っており、両方共アキアジ鍋と言っていた。　話者　吉岡タカ

ウ、昭和二十（一九四五）年代

① 新巻のアキアジ鍋

素材　新巻鮭の身及び頭、骨または塩引き鮭の身及び頭。野菜（五升薯、大根、人参、牛蒡、豆腐、コンニャク、長ねぎ、酒、塩、七味唐子、ショウガ）

作り方　鮭類は一昼夜水につけ塩抜きして角切りにしてザルに上げておく。

五升薯は角切り、大根、人参はイチョウ切り、牛蒡はささがき、長ねぎははすに切る。豆腐、コンニャクはお好みの形。

鍋にカップ1杯（一人前として）の水を入れ、昆布だしで煮立て、鮭の身、頭、骨と野菜を入れて煮る。野菜がやわらかくなったら、豆腐、コンニャクを入れ、酒、塩、調味料を入れ味を整える。

長ねぎを入れ火を止め、七味唐子、ショウガを入れて出来上がり。

話者　吉岡タカ
明治三八年生

注、これが石狩鍋と言われ始めた頃の原形でなかったか。

② 生鮭のアキアジ鍋

素材　生鮭を三枚に卸し、身は角切り、ドンガラ（粗）は適宜切る。

野菜（大根、人参、白菜またはキャベツ、玉ネギ、長ねぎ、山椒、昆布だし、豆腐、コンニャク）

塩味の場合は酒粕または酒少量。

味噌仕立の場合は酒少量。

作り方　鍋に鮭を入れコンニャクを手でちぎって入れ、大根、人参はイチョウ切り、白菜またはキャベツを適宜に切って入れ、豆腐を入れ、昆布だしをそそぎ（塩仕立のときは酒粕をとく）味噌を酒少量でとき入れる。

煮立ったら、火を止める直前に山椒を入れて出来上がり。

話者　吉岡タカ

注、昭和二十（一九四五）年代後半、鮭漁最盛期になると札幌市を中心とする各方面から多くの観光客が来町し、割烹、料理店、食堂での店独特（塩仕立、味噌仕立）の鮭鍋を提供するところとなり、この頃から誰言うとなく「石狩鍋」の名が出始めた。

エ、昭和三十（一九五五）年代

注、塩仕立より、味噌仕立の生鮭による石狩鍋（アキアジ鍋）が大衆化され来町する人々は「サケ鍋」「アキアジ鍋」と呼称するより「石狩鍋」と呼ぶ人が多くなって来た。

素材　身卸したサケをぶつ切りまたは角切りにする。ドンガラ（粗）を適宜に切る。

筋子（バラコ）白子、大根、人参、玉ネギ、白菜またはキャベツ、牛蒡、コンニャクまたはシラタキ、豆腐（好みに応じて）味噌、酒（少量）、砂糖（少量）、味の素（少量）

作り方　鉄鍋、土鍋に水を入れ昆布を敷き煮立ったら、サケの

ぶつ切り、ドンガラ（粗）、白子を適宜に入れる同時に野菜を入れて煮る。

調味料として、味噌、砂糖（少量）、味の素（少量）を酒でとろとろになるまで溶かす。煮上がったら鍋に入れ、なお煮立ったらバラコ（筋子）、長ねぎを入れ、下ろす直前に粉山椒をふって出来上がり。アキアジ鍋はこの頃、作る人が試行錯誤して食べる人に「味はどうですか」と尋ねてその人独特の鍋料理を作っていた。

話者　吉岡タカ

注、この頃、[昭和二十七・八（一九五二・三）年～昭和三十七・八（一九六二・三）年] 鮭漁の全盛期（九月上旬～十二月下旬）にはひと月七・八百人から千名位の観光客が訪れていた。鍋料理は料理店などでは間に合わず、寺院の広間、好天時には外の広場で心得のある主婦が手間返いして石狩鍋を提供した。

なお、これにたりず、弁天町や横町の漁家がにわか食堂となって知人を頼って来る団体客に石狩鍋を提供したものである。（石狩鍋定着）

オ、昭和五十（一九七五）年以降の石狩鍋

料理研究家　南部あき子

石狩鍋（四人分）

素材　サケ、四〇〇グラム　白子、筋子少々。豆腐一丁、コンニャク一枚、大根一五〇グラム、シイタケ四枚、ゴボウ五〇グラム、長ねぎ3本、ホウレン草一〇〇グラム、白菜四枚、ササゲ五〇グラム、だし昆布三センチのもの三枚、昆布だし適宜、合わせ味噌（味噌一〇〇グラム、みりん大さじ二杯、砂糖少々）塩少々、粉サンショウ

作り方　①サケをぶつ切りにし、白子は適当な大きさに切り、筋子は皮から取り出し、バラコにする。②豆腐は角切り、コンニャクは一口大にちぎり、大根、シイタケは半月またはいちょう切り、ゴボウは笹がきにし、ネギは斜め切りにする。③白菜とホウレン草は茹でて、ホウレン草は芯にして白菜で巻き、3・4ケ所を細く切った昆布で結び、2～3センチくらいに切る。ササゲはすじをとって手で折って青茹でにする。④鉄鍋または土鍋に昆布を敷き、中央に合せ味噌（味噌、みりん、塩を混ぜたもの）をおき、まわりにサケや白子、筋子、豆腐、コンニャク、野菜など並べて入れる。⑤昆布だし汁をそそいで煮ながら粉サンショウをふりかけて出来上り。

注、サケは鮮度のよいものを用い素材は、煮すぎないように注意し、鍋の煮汁が沸騰したらアクを丁寧にとり除くこと。合わせ味噌は好みにより辛口または甘口に作り、また、醤油味に作ることもある。

以上全国的に有名になった石狩鍋の由来を記したがまだまだ不明な部分が多い。発祥の由来を特定せずそのむかし石狩浜に訪れ、サケ鍋を堪能した人々によって作り出されたとするのもロマンがあってよいのではないか。

北千島サケ・マス流し網漁めしたき物語

～北千島占守島長崎港を基地として～

吉岡玉吉

― はじめに ―

北千島、北千島幌筵島、占守島を基地として操業した独航船による鮭鱒流網漁業は昭和十年代が最盛期だった。昭和八年（一九三三）から昭和一九年（一九四五）第二次対戦が終結しソ連（現ロシア）に領有されるまで続き、石狩港からも、七漁業部、十数隻の独航船が出漁した。

当時、町に生活する漁家の若者達は挙って、北千島の鮭鱒流網漁に憧れ、心身を鍛えた。一五、六才となり、小学校高等科を卒業すると見習の適齢期となると勇躍雇用の申し込みをしたものである。

多くの若者は独航船の漁労長、船長、機関長を夢みて海技免状（国家試験）取得（一八才以上）に奔走していた。手っ取り早くは、独航船乗組員の一員となり、見様見真似で漁労の方法や操船、操作法を身につけ海抜免状を受けることになる。昔から、船乗りは、飯炊き（かしき）から始まるものであり、筆者も一五才で期間は短かったが、陸廻り（漁労のための陸仕事）の飯炊きとして出漁した。

注一　飯炊き。飯炊き（ままたき）ともいう。
「かしき」は弁財船（北前船）の見習い水夫で炊事係のこと。
飯炊き。船内の食事係。出漁時は漁夫。岩手、福島地方の方言（名詞）
飯炊き
御飯のことを飯という。炊事係のこと。秋田、岩手、山形、新潟、群馬地方の方言（名詞）

注二　陸廻り
網の修理など船上で出来ない仕事を陸上でする。一隻につき一人から二人が配置される。高齢者の経験豊富な者が当たる。時には舟長、水夫長上がりの人もいた。

一、北千島の概要とその島々

千島列島の東北端に位置し温祢古丹海峡から北の、阿頼渡島、幌筵島、占守島、志林規島の四島と鳥島列岩を北千島と呼ぶ。

占守島から僅か十二キロ離れてカムチャッカ半島の勘登加岬（ロバッカと呼んでいた）と相対する。北千島の緯度は幌筵島の南端が北緯五〇度。北端は阿頼度島の最北端で北緯五〇度五分である。経度は志林規島の東経五六度三三分である。ちなみにわが石狩市は、北緯四三度一八分一五秒～四三度二八分一五秒。東経一四一度三〇分五五秒～一四一度一二分三〇秒である。

1　阿頼渡島

ロシア語名、　アトラソブァ島
日本語名（呼稱）　親子場山。　阿頼度富士。
阿頼度山。　阿頼度

幌筵島の北西約二十キロのオホーツク海に聳える長さ十七キロ、幅十三キロ、周囲四十四キロのほぼ円形の島。島の北端は北緯五〇度七分で、かつては日本の最北端であった。島全体が一つの火山で阿頼度山（二・三三九メートル、クリルアイヌはチャチャコタンと呼んでいた）という。富士山を海に浮かべたような美しい成層火山であり千島列島の最高峰である。

注

昭和十七年五月二十六日、独航船第五長栄丸に乗船、占守島に向う途上、幌筵島を右舷に見て左斜北方に紺碧の海にそびえ立つ白雪皚皚たる阿頼度富士を仰ぎ見たとき霊峰富士を思い浮かべ、自然の偉大さとその秀麗を脳裏に納めた次第である。

注

日本地理体系第十巻北海道樺太編（昭和五年）によれば、列島中最北の休火山島。北海道以北の最高峰（二三五八メートル）で四季雪を戴き、富士の如き壮観を呈する。本邦最北端、北緯五十度五十六分は此の島の北端である。と記されている。

北海道の最高峰旭岳（二二九〇メートル）より高く、晴れた日にはカムチャッカ半島の山々が望まれる。阿頼度島の南岸は断崖絶壁が続き、北岸は少々平低でところどころに砂浜を形成する。好適な港湾となるところはほとんどなく、東京湾、南浦で上陸できる程度である。大小十余の河川はいずれも名前はなくいずれも阿頼度山に源を発し西方に向って放射状に流下する。

阿頼度山は二重式火山（注　外輪山の内部に中央火山口があるような構造の火山）で外輪山に東岳と西岳があり東岳が最高地点、外輪山は南側に大きく崩壊し、その内側に中央口がある。噴火活動は活発で一七七〇年（明和七年）、一七八九年（寛政元年）～九三年（寛政五年）、一八二二年（文政六年）、一八四八年（嘉永元年）～一八九四年（明治二七年）に噴火している。

（東京大学理学部年表による）

昭和八年（一九三三年）には一の渡湾沖で海底噴火が発生し、寄生火山（火山の中腹や裾野に新たに噴火して生じた火山。富士山の宝永山や大宝山の類）である武富島が誕生した。

資料二参照

近年では一九八一年（昭和五六年）に頂上噴火があった。従って火山灰層と集塊質（火山噴出物の採屑がかたまって出来たもの）噴出物層と互層の間に溶岩流を挟む典型的な成層火山（噴出した溶岩や火山灰が次第に噴火口の周囲に堆積して層をなしている円錐形の火山。富士山。八ヶ岳。羊蹄山）である。

山腹の周囲には多数の寄生火山が放射状に並んでいる。阿頼度島の生成は幌筵島の千倉岳、尻鱗岳と同じく千島列島でも最も新しい時代と推測されている。

昭和一七、八年（一九四二、三年）頃では無人島で時化の時など島陰に独航船などが避難するほどであった。漁期（六～八月）にはタラ釣り基地四ヶ所、鮭鱒建網基地一ヶ所が操業していた。（北浦、波川崎、東京湾、南浦、魚見崎）

2　幌筵島

附図参照

ロシア語　パラムシル

日本語　パラムシロトウ

ホロムシロと呼称していた。

クリルアイヌが、ポロムシリ「大きな島」と呼称していた。幌筵島は北東より南西に至る長さ、およそ一三〇キロ、最大幅およそ三六キロ、二〇四一平方キロメートルの長方形の北千島で最大の島である。

日本地理体系第十巻北海道樺太編、改造社、昭和五年（一九三〇年）二月二〇日発行によれば、「長さ九一粁、幅一六粁、面積一四五五方粁、主峰ファッス峰『シリアシリ』と称し、西南小半島にあり壮麗な円錐をなし、その北東のチクラ『ジャコムシチ』は活火山である。他に三子山、鉞山、円錐山、尖錐山等があり、いずれも一〇〇〇米前後である。湖水渓流も多くトルキー、シペットボ川が著しい。太平洋岸は浅瀬をなし、反対側は絶壁が多い。占守島との間はハラムシル海峡をなし、村上湾、相原湾があって占守島の片岡湾に相対する」とあ

る。

幌筵島の主要基地は柏原でこの名詞は明治二十二年（一八八九年）波羅茂知（幌筵）の湾に測量のため入港した軍艦、磐城（愛称ばんじょう）艦長海軍少佐、柏原長繁の名守をとったものという。

この島は列島二十三島中の択捉島に次いで二番目の大きさである。島には千メートル級の秀麗な山岳がならび千島列島の第三位から第五位の標高山岳がある。山脈は島の北端硫黄岳（一一三六メートル）から南へ千メートル内外の標高で連なる山脈、島の西部にほぼ南北に連なるち千倉連峰との二つがある。

この他、山そのものが一つの半島を形成する後鍬岳（フツサ。一七七二メートル）がある。この他この島には一〇〇〇メートル級の山岳が二十六もある。

千倉連峰（千倉岳『チクラチキ』一八一六メートル）の分水嶺としての轟川（二十五キロ）あるいは熊川が長い水系を成している。この他の川は十キロ程の長さしかなく、西海岸に注ぐ河川として茂寄川、西川、加熊別川、鴨川などがある。東海岸には鱒川、連毛川、日の出川などがあるがいずれも短い。

島の北西面は急傾面で断崖となり南西面は比較的緩傾斜となっていて、所々に平原となっており、昭和十年代（一九三五年）にはタラ釣漁場及び鮭鱒建網漁場があった。

波風を遮断する良港としは両岸には鯨湾、加熊別湾。東岸では擢鉢湾、武蔵湾、塁山。幌筵海峡（ハラムシル海峡）には村上湾、柏原湾がある。

地質的には堆積岩層ならびに深成岩からなる基底（基礎となる底面の地質）地質とこれを覆う多数の火山から構成される最も新しい時代の活動を行った千倉岳と後鍬岳は典型的な円錐形を示す成層火山（コニーデ）である。千倉岳は昭和六一年（一九八六年）大規模な噴火があった。このほか硫黄山（一一三六メートル）大硫黄島（一四九三メートル）山煙山（一三四五メートル）などの活火山がある。

注一、堆積岩
岩石の採屑物または生物の遺骸などが流木または風などによって他の場所に運ばれ沈殿堆積して生じた岩石。砂岩、頁岩（水成岩の一種。泥板岩の別命。灰色または黒色で、砥石や硯に用いる）石灰岩の類。水成岩。沈積岩。

注二、深成岩
火成岩の一種。地下の深い所で固まって出来たもの。完全に結晶し、粒状の組織である。花崗岩。

3　占守島

附図参照

ロシア語名　シュムシュ
日本語名　しゅむしとう（占守島）

クリルアイヌのシーモシリ「美しき島。よきしま」あるいは「親の島（先頭にある島という意味という）から「しゅむしゅとう」と呼ばれるようになり漢字をあてはめたもの。

幅一キロ余の幌筵島に面し、カムチャッカ半島の南端ロバトカ岬（通称ロバッカ）と僅か十二キロしか隔かれていない。島は北東の長さ約十二キロ、南東約二十キロの弾丸の様な形をしている。高い山はなく緩傾斜の丘陵が起伏し湿地、湖沼が多い。最高一七六メートル（三好野）で占守島には火山はなく溶岩火山砕屑物も認められない。他の千島列島の島々とは誕生を異にしている。

注一、日本地理体系第十巻北海道樺太編（昭和五年二月二十日発行）によれば、長さ三十粁、幅十八粁、面積二三〇方粁、最高部も一七六米に過ぎず、偃松、赤楊、蘚苔等を生じ他の島と異なり地勢低立陵牲を呈し、南岸子林、河畔等は耕作され、郡司成忠氏の報效義会本部がある。

片岡湾は幌筵瀬戸に臨みて錨地をなし、島の北端の圍端岬（国端岬）はカムチャッカのロバトカ岬と相対し、その間一三キロメートルにすぎない本邦最東端の島である。（高橋純一）とある。

注二、明治二十六年（一八九三年）郡司成忠大尉率いる報效義会が開拓に入った。この開拓団の一員であった別所佐吉は報效義会解散後も島にとどまり北千島唯一の定住者となった。

注三、筆者が作業基地として上陸した長崎は、片岡湾『海軍基地』から南西四キロ弱の砂底地帯にあって、対岸の幌筵島柏原湾『陸軍基地』より幌筵海峡を隔てた約四キロの位置にあった。

幌筵海峡は、干満時の潮の流れは、毎時最大三哩前後と記憶する。出入りする独航船の船脚が島影に滞る光景が見られた。占守島には、片岡湾を基点として漁業基地は、長崎、蔭澗、中川、咲別、沼尻、小沼、（竹田浜は、ソ連軍が上陸して来た地点）国端岬、天神岩、北川に存在し、流網二（片岡、長崎）、タラ釣り十一、カニ二、鱒縄一、鮭鱒建網五、底建網一、計二十二基地、六ヶ統であった。

（昭和十七年『一九四二年』六月ころ）

4　志林規島　　附図参照

ロシア語名　シリンキ

日本語呼び名　しりんき又はしりんきとう（志林規島）

幌筵島とは志林規海峡を経て、西方に温弥古丹海峡をはさみ麿勘留島（中部千島の北端）の北東に位置する東西長さ四キロ、幅三キロの小島、全島が一個の山岳からなり、標高七五一メートルの蓮華岳が中央に聳える。海岸は懸崖直立し、船舶が接岸すること不可能な無人島である。

5　鳥島列岩　　附図参照

幌筵島荒畑崎東北東約三キロメートルの太平洋上にある列岩帯、三個位の岩礁で構成されている。以上四島、一列岩を北千島という。

参考　　資料一参照

中部千島……一五島、一列岩

牟知列岩、麿勘留島、温彌古丹島、越渇留磨島、雷公計島、捨子古丹島、松輪島、春牟古丹島、羅処和島、宇志知島、計吐夷島、新知島、武魯頓島、知里保似島北島、知里保似島南島、得撫島

南千島……三島

択捉島、色丹島、国後島

6　現在の北千島の概要

一九九〇年（平成二年）四月、北大山とスキー会山スキー部が構成して北千島（阿羅度、幌筵島）の遠征報告の北千島概略図

別添資料一参照

二、石狩港出漁から占守島操業基地まで。

乗組員名簿　資料三参照

昭和十七年（一九四二年）五月二十日石狩町吉岡漁業部、船主、吉岡由太郎（現、石狩市漁業組合長、吉岡治男氏実父）所有、北千島鮭鱒流網漁業独航船、第五長栄丸、二三、八五屯、（僚船、第一長栄丸、福運丸、計三隻）の乗組員、漁労長兼船長以下十二名と共に陸廻り要因八名の一員として乗船、町の知人有志から贈られた大漁旗をマストになびかせ勇躍、家族、知人、町の人々（小学校は漁船員の中に父兄も相当数いるから学業をさいて見送るなど盛大な出漁風景で石狩港の風物詩であった）に見送られ、午前十一時、船団（吉岡漁業部三隻、吉田漁業部一隻、金田漁業部二隻、後藤漁業部二隻、柴田漁業部一隻、有田漁業部一隻、計十隻）を組み一斉にサイレンを吹鳴して出港、多くの人々は、石狩川の河口を離れ望来浜沖合に至るまでハマナスの丘に登って見送ったもので年中行事の一つとなっていた。

厚田沖で石狩町から厚田村に鰊刺網漁に来ている漁業者及び出漁関係者親族らの送別を受け、午後0時三十分頃、愛冠岬、午後二時四十分頃、雄冬岬をかわして、船脚の後方に白日の夕陽をあびながら午後六時三十分頃、留萌港に入港し一泊。翌二十一日午前三時頃同港出港、天売、焼尻島を左舷に見て遠別沖付近で、利尻富士（一七二一メートル）を左舷に望観しながら航海。砂浜の続くサロベツ原野を右舷遠方にして抜海岬を経て野寒布岬をかわして午後五時頃、稚内港に入港。一泊。

本船、巡航速度一〇ノット（時速二〇キロ）程度。翌二十二日午前四時空模様を見て出航。北海道を後にして宗谷海峡を横断。海峡のため北東の風と相俟って三角波立って船酔気味。

樺太中知床岬から一路（注、出漁当初の昭和八、九年頃は稚内から南千島に至る島伝いに向かったもの）北千島志林規島に羅針儀でコンパス（針路）をとりオホーツク海を横断。途中半ばにして猛吹雪に遭遇したが、僚船共々無事航海。「五月もすぎようとしているのに一寸先見えない風雪、石狩より凄い、やっぱりオホーツクだな」と甲板上で震えた。

二十六日、早朝、温禰古丹、魔勘留島沖を通過、志林規島に至る。同島をかわすと右舷前方に幌筵島西端幌津崎、白一色の後鍬岳がせまり北千島の一角にたどりつき一層寒さを感じた。幌筵島の島沿いを北へ進むころ、左舷斜め前方に阿頼渡富士の雄姿が望観され、その雄大さに寒さをわすれて驚嘆した。

とにかく白一色の島々を見ながら午前十時三十分頃、幌筵島、平田崎、磐城崎をかわして待望の漁業基地、占守島長崎に到着した。根室から占守島まで、約一〇八〇キロメートル、島々は白一色五月下旬とは言い、白雪皚皚たる様相を呈しており、山々は海岸から頂上まで黒一つなく、寒さも石狩の真冬以上に感じた。（注、気温は石狩の三月上旬なみ）

さすが北千島だなと感嘆しつつ上陸、即日から漁労の準備に入った。第五長栄丸他、僚船は即日試験操業ということで出漁した。

三、操業及びその生活（漁労関係省略）

1.　陸廻りの主な仕事

㈠　日課

午前五時起床　朝仕事
網干場で網の乾燥
午前　七時　網きより（修理）
午前　八時　朝食
作業開始、
主として網きより
午前一〇時　三〇分休憩（ほとんどなし）
正午　昼食
午後　一時　作業開始
午後　三時　三〇分休憩
午後　五時三〇分　作業終了
午後　六時　夕食

注、①盛漁期になると魚がかかって網が切れたり、時化でやぶれたり流し網は痛み、その網きよりと漁具の修繕で多忙になり休憩時間もなく、又、夕食後も手元が見えなくなるまで作業した。
②北千島の真夏は石狩より二時間早く夜があけ、二時間遅く日が暮れる。午前二時頃には手元が見える位明るくなる。又、夕方は陽が幌筵島の島影（硫黄山）に落ちるのが午後八時三〇分頃から同九時頃であり暗闇になるのは三時間位しかなかった。月夜などは白夜のようだった。だから眼が覚めたら太陽が昇っていてあわてて起きたら午前四時ころであったと言うことが間々あった。

(二) 当該、陸廻りの仕事は、同漁業部所属独行船三隻の漁具の整理、特に流し網の網きより（修理補修）を主とするものであるが中でも網の捩れを戻す「樽廻し」は大変な労働であった。この作業は一仕能中（漁の期間中）に七、八回あった。

注、「樽廻し」
時代（しけ）または潮の流れの早い海面や海峡等で網した時、流れに翻弄（ほんろう）されて二、三時間で数十反（一反は約四十五メートル）の網が捩れ現象をおこし縄状になり漁獲不能となる。（潮の流れが速く海水が渦巻き状態となるため）この部分を取り外して、船内でもできるが大部分は陸で処理する。
陸廻りでは「縒（よ）り戻し樽（たる）」を一反当て入れて、数人が手動で樽を廻して捩れ戻しをする。一反の網を戻すのに数時間もかかることもあった。
その他、漁網は昭和二十年（一九四五年）頃までは主としてラミーを使用していた。この繊維は水中に長く使用するとべたつき羅網率（鳥をとらえる網、転じて魚のかかる率）が悪くなるため、当該漁網を陸に上げてカッチで染めて再使用する。この作業も陸廻りの一つであり、この他船上で出来ない漁労用機材の修理など様々な仕事が山積していた。
この人々（七名）の炊事当番（飯炊き）が筆者（一五才）の役割で炊事仕事が終了後は網干場に出て仕事するのが日常であった。

注、ラミー　通常ラーミーと発音していた
苧麻　からむし、いらくさの多年草、山野に自生、南京麻ともいう。一、五メートルくらいになる。茎の皮、繊維で越後縮（えちごちぢみ）や漁網として使用。日本では昔から精製して繊維とした。

注、カッチ
フィリピン産の木の煮沸汁で造った染料。

四、飯炊き作業のあれこれ。

1　南瓜一個がベニ鮭二本分、（一円七〇銭）

昭和一七年（一九四二年）魚一尾の工場渡し代価（北千島水産調べ）ベニ八五銭、ギン三五銭、シロ三〇銭、マス二〇銭。

タンパク源は鮭、鱒を始め魚類豊富であるが、ビタミン類が皆無で片岡湾で南瓜一個、紅鮭二本分（一円七〇銭の値段ということであった。それでも「買って食べてみるべヤ」となって紅鮭、二本分と物交（物々交換）して味噌汁の具にして食べたが、ションベンカボチャ（海岸方言で小便南瓜）で水っぽかったが、それでも南瓜の味がして食事が潤った。

野菜については、乾大根、干菜、ワカメ、五升薯（馬鈴薯）等を持って行っているが、ビタミン系が不足がちなので、平坦部に雪があるうちに丘陵の這松の間を耕作して、寒さに強いミズナ、ハクサイ、タイナ、夏大根等を植えた。

芽が出たと思ったら、一〇日位でミズナ、タイナは食べられるまでにのび、見ると一日に二、三センチ程ものびている有様、何故このように早いのかと思案した結果、霧の深い日もあるが、日照時間が石狩周辺より二時間前後も長い。朝夕四時間も日照りがあれば植物の生長が早いのは当然であると理解した。

2　朝はまた五時から起こされて

「北千島漁労数え歌」ではないが、「夜はまた一二時まで夜なべして、朝はまた三時から起こされて、やれよ、やれよとせめられるぞエェー」これほどにはならないが、毎朝五時、一般の人より三〇分早く起床、飯を炊く。ほとんど一汁一菜の他に夕食は鮭鱒の焼魚、又、鮭を具にしたカレーライス、三平汁などが定番であった。

注、漁期中は味噌、しょう油漬けは御法度。不漁するから、チュンチュン（チャンチャン）焼きもしてはならなかった。

味噌汁は切干大根、干菜（大根葉）が主で、玉ねぎ、モヤシ類は高級品である。六月中旬すぎに蒔いたミズナ、タイナ等は味噌の具ではなく浸し物（おひたし）として献立した。

なにしろ全く始めての作業であり、作る側に廻ったことのないため、出発時、母から米の研ぎ方、味噌汁の作り方、など一般的な調理法を聞いては来た。

しかし慣れないないまゝに御飯を炊き、皆に「毎回ちがった飯が出来ていゝな。どうなっているんだ」などと皮肉を言われる始末。明けくれ苦労の連続であった。それでも切り上げ日近くになってどうにか「旨いマンマ（御飯）が炊けるようになったナ」と誉められるようになった。

㈠　御飯の炊き方

炊き方のコツは薪、石炭、鍔釜で炊き、その火加減が重要である。むかしからのことわざに、「初めチョロチョロ中パッパ御粘が出たら火を引いて、赤子泣いてもふたとるな」が要領であった。

新米、古米では水の量で加減するが、大体手のくるぶしの上位どころを目やすとした。飯の炊き方は水から炊かない（海軍方式）一旦水を沸騰させてから、あらかじめザルに研いでおいた米を入れ、水加減を

する。

もう一つ大切なことは水加減をし、フタをする前に釜の中央に湯の中の米に穴を掘るようにする。お湯は沸騰することによって周囲へと回転するものでこれは米に平均して熱が当たるようにするためである。

同じ釜でも御飯というものは釜の中の場所によって味が違うもので一番うまいところは、釜の周囲から三寸（一〇センチ）位の内側のところである。

注、海も陸も麦などの混ぜ物はなかった。

㈡　味噌汁の作り方

味噌汁なんてものは、ダシを取った湯に味噌を入れて掻き混ぜたら味噌汁だと思っていた。ダシの取り方で味が左右する。前の晩から鍋（釜）に水を入れその中にイリコ（小さないわしをいって乾燥したもの、いりぼし）をほおり込んでおくだけでダシを取った。翌朝水の中のイリコをすくい上げて捨てるだけである。始めはイリコは煮なければダシはでないとばかり思っていた。

後は熱を加えて煮えにくい野菜から入れて行く、煮えたところであらかじめ溶かしてあった味噌を流し込んで出来上がりということになる。ただ、玉ねぎ、長ねぎ、モヤシなどは最後、火を止める前にほうり込んでフタをして余熱で煮える程度にすることがコツで重要なことは味噌汁は、絶対沸騰させてはならないと言うことで、これも海軍主計兵の鉄則であったという。筆者もこれにならって味噌汁作りをした。

○サケ、マスのスリ身や蒲鉾料理

アザラシに頭を喰われたサケやマスを陸廻りにも上げられることがある。これを桟橋で足（ゴム長靴）で踏み、均（なら）して皮を取り除き、擂鉢で擦って調味料（味噌、酒、砂糖）を加えて、スリ身汁、蒲鉾、焼蒲鉾を作った。これは甘い。当時としては高級品だった。

○タラバガニの剥き身も北洋の華だった

一ヶ月もすぎると三食、サケ、マスの料理ばかりでは飽きたということで、長老から「カニ缶詰工場さ行って、アキアジとカニとバクって（交換すること）来て鉄砲汁でも喰わせろや」と言われて、モッコ、にシロザケ、四・五本入れて缶詰工場へ物交に出掛けた。加工場の流し場には二十才前後から三十才代の女工さんが、三十人位も居り、カニむきの最中であった。

責任者に来意を告げると、無造作に「アァい、よ」と言ってくれたので、中に入ると「アンチャン何処から来た」「生まれはどこだ」と矢継ぎ早にし立てられ、「アンチャン、メンコイナ（かわいいナ）可愛がってやるから、泊まっていけや」などとからかわれながらタラバガニを三、四杯貰って来た。ボイルして食べたり、カニメシを作って食べた。脚一本で満腹感を味合うことが出来る程であった。

注、タラバカニはヤドカリ属、親爪の他、脚は三対よりない。全長、脚をひろげると一五〇センチにもなるものがある。貰ったカニは一五〇センチはゆうにあった。

○北千島のカジカ鍋も風味はあった。

又、飽きて来たら「カジカ鍋を食べさせろや」と言うことで、荷揚桟橋（全長約五〇メートル）に行き（水深二、三メートル）水中をの

ぞくと三、四〇センチのカレイ（ブタカレイ又はロシアカレイ）が木の葉の様によいでいる。その間にやはり三、四〇センチのカジカ（ギスカジカ……石狩ではゴムカジカと呼ぶ）がカレイの間を泳ぎ廻っている。

エサは、タクアンで充分。適当に切って、カジカの頭部分におろしてやる。そうでなければ、ババカレイがパクつく。これをさけるため、そろっとカジカの口元に合わせて釣り上げる。魚の口元に針を持って行って釣るのであるから釣りの醍醐味などあったものではない。十分もしないうちに五、六本のカジカを釣り上げた。

海辺から二、三〇メートルも出ると海底は魚、魚である。カジカは石狩湾近海のものより数段味は落ちるが食べられない程ではない。また、北千島のカレイ類は、身はやわらかく食べられたものではない。沖合いでトロール船が肥料生産のため底曳き網で漁獲しているときく。それでも非番休憩中の兵隊さん（曙部隊船舶工兵）がよくこの桟橋で魚釣りをしていた。

釣って来たカジカは味噌仕立てでニンジン、五升薯、ミズナ等の野菜を入れて「カジカ汁」（鍋まで行かない仕立）にして食べたら、まずまずで「トキタマ（時々の意）作って喰わせろや」と評判がよかった。

○タラを釣ってタコを食べた。

海峡周辺（幌筵海峡）には生息していないが、北千島各島々周辺は、真ダラ漁の本場（タラ釣り場）である。鮭鱒流網漁の独航船でも操業の合間に食料用にタラ釣り（真ダラ、全長、一・二メートル、体重一〇キロ位のものもある）をして持って来てくれることがある。

さばいて、胃を見ると異常に大きくふくらんでいる。割いてみるとタコ（一杯タコと言った）が入っている。タラはタコが好物である。のみ込んだばかりのタコは新鮮で乗組員の中には、釣った間もないタラの腹を割いて見たらタコがまだ生きていたこともあったという。

タラの胃の中に入っていたタコは赤味をさしていたが、タラが食べたものと思って捨てようとしたら、先輩が「こら、そのタコ投げるな。茹でれ、みんな喰うんだぞ。」というので、洗って、茹でたら赤くなって旨そうになった。夕食時、適度に切って盛り付けしたら、「甘いど、又、船（第五長栄丸）に頼んでおけや。」ということになった。

五、基地長崎周辺の模様と小動物や草花

漁業基地長崎は幌筵海峡に面して海辺より一〇〇メートル位は砂浜状でその一端に長さ五〇メートル程の桟橋があり時折所属独航船荷揚げ、繋留場として使用していた。これにより東方向、海抜一〇メートル程度の丘陵地帯に半地下製の暁部隊の兵舎が地上に屋根のみが見える状態（厳寒の冬期、マイナス二〇度の寒気、三〇メートルを超える暴風雪、これに耐えるよう半地下壕としたとのこと。）で建設されていた。

注、当該桟橋は藤野缶詰工場所有の附属加工工場及び倉庫群でこの年（昭和一七年）から操業を片岡湾に移したことによって廃屋になり、南側倉庫を吉岡漁業部が借用し、北側加工場及び倉庫を陸軍船舶工兵（陸部隊）が使用、その一部を監視哨部門として活用していた。

また、自然現象の中で千島特有の濃霧（のうむ）がある。道東の釧路地方の濃

霧も人々の悩みの種となっているが、北千島周辺の五、六月の濃霧は最盛期で、海上も陸上も、「一寸先は闇」ということわざがあるが、一メートル先は「闇」と表現したくなる程、ガスル。（化する。）

霧は掛かる、と表現するのが普通であるが北千島では霧は降る、と表現がピッタリで、二、三〇分もすると着ている衣類は濡れて身体が冷たくなる。ですから陸の仕事でも合羽を着て作業する。風も無く一日一杯続く、干場の網も濡れっぱなし、六月では三分の二は濃霧が降る。海峡（幌筵海峡）を行き来する軍艦、輸送船、独航船の霧笛、警笛が遠く近くに聞こえる。しかし、多くの船が通る海峡内では濃霧のため衝突した。という話は聞かなかった。

七月に入ってからは濃霧の降る日は少なくなった。海で仕事する人は挙って霧を通して見える眼鏡でも発明されないものかと語り合っていた。

注、濃霧（がす）発生のメカニズム。

対馬暖流（黒潮）

厚さ、六〇〇～七〇〇メートル、幅三〇海里位、流速四～五ノット位、（一海里＝一ノット、一時間に一八五〇メートル進む速度）台湾南東方以降で発生、日本列島をはさむようにして北上する。一方、千島寒流（親潮、千島寒流）厚さ、二〇〇～三〇〇メートル、幅一〇～一五海里位、流速、〇・三～一・三ノット位。

プランクトンや栄養塩類豊富な日本近海の代表的な寒流でオホーツク海、ベーリング海の低塩分水が千島列島沿いに南下して金華山沖合周辺でぶつかり合う、このため霧が発生する。特に温度の低いところ程、濃い霧となる。北海道東部地方、南千島、中部千島、北千島と北上するごとに濃くなって行く。（水産百科事典）

○占守島長崎周辺の植物。

北千島の島々は、亜寒帯（高山植物）植物が多く、ミヤマハンノキ、ハイマツが主要樹種である。

占守島長崎周辺の樹種としては、「日本地理大系第十巻北海道樺太編、昭和五年」では偃松、赤楊、蘚苔、等が生じ云々としているが、この頃昭和一七年（一九四二年）ではハイマツ（這松）を主体にミヤマナナカマド、キンロウバイ、キバナシャクナゲ、ガンコウラン、コケモモなどの灌木類が混生している。樹木の六〇パーセントはハイマツであった。

乗組員で興味を持つ人は、時化などで出漁出来ない日に上陸して、箱材で鉢を作り、附近に自生するガンコウラン、キンロウガイ、コケモモ、キバナシャクナゲ等を採取して持ち帰っていた。

注、偃松・這松

マツ科の匍匐性常緑灌木。葉は針状五本ずつ叢生する五葉松の一つ。北海道北部、千島に自生、本州では中北部の高山に自生。

赤楊・シャクナゲ（石南花）

ツツジ科の常緑灌木。高山に自生。しばしばハイマツと混生。高さ一～二メートルになるが、この地では匍匐する。

蘚苔・苔

古木、混地、岩石の表面などの生える。花の咲かない低い植物を総評する。蘚苔植物と呼称する。

○占守島長崎周辺の動物たち。

熊やキツネ等は幌筵島、阿頼渡島に生息するが占守島には生息しない。主要動物は小動物である野ネズミでハイマツの中を時に縦横に走

り廻り獣道ならぬ通路が無数に走っている。身体は本道のドブネズミよりひと廻り大きく、尾はこの種より短く、敏速に行動出来ず、よろよろ走り廻っていた。人家に入ることなく、ハイマツの間を見ると間々に姿を見ることができる。それほど多く生息している。これは外敵が少ないためだろう。その他の動物は見られなかった。

鳥類は、鴨、鴎はわずかに飛来しているのを見るが、厚田浜や石狩浜の漁期（鰊漁）のように多量に飛来するようなものではない。一羽二羽程度の飛来である。

経験ではないが、蔭の澗方面の岩場に六、七月頃巣作りしたゴメ（鴎）の卵を取ってタンパク源にした。という漁船員の話があったが定かではない。期間中渡り鳥などの姿、また鴨、鴎の姿は晴天のとき、時折り見る程度であった。

鴉はハシブトか、ハシボソかはっきりしないが、本道にいる鴉より一回り大きく鳴き声もテノールで、動作は緩慢、海岸線に餌（魚類）が打ち上げられていても見向きせず、素早い動きは見られず、追うと逃げる程度であった。数は少なく何日も見ることはなかった。又、すずめの姿は仕納中見られず、動物や鳥類の鳴き声も聞かれなかった。

六、僚船福運丸の遭難事件

六月下旬、漁期最中僚船福運丸は操業のためカムチャッカ半島ロバッカ岬（ロバトカ）沖に出漁、帰港予定時の翌朝一〇時前後になっても帰ってこない。　翌日になっても帰港せず、僚船（第一長栄丸、第五長栄丸）はもとより所属漁業会社出漁船も出漁傍ら捜索が始まった。

捜索は濃霧と西寄りの風で困難を極めて三日目を迎えたが、何の手がかりなく経過した。福運丸の出漁場所は、この頃（六月下旬）鮭鱒が一番回遊するロバトカ沖の太平洋側に出漁したと推定し、各船もこの方向を優先して捜索したが、手がかりはなかった。戦時下であり海軍に捜索方を依頼することも出来なかった。それでも片岡湾に基地を持つ水産会社、柏原湾に基地を持つ水産会社所属の独航船二百余隻が捜索に当った結果、行方不明になってから七日目に、発見され、曳航されて全員無事帰港した。

僚船乗組員、陸廻り一同、万歳三唱するごとく祝福した。

後日、番屋（陸廻り宿舎）で漁労長兼船長である金田平治氏（明治四十四年生まれ、当時三十一歳、郷土研究会会員金田隆一氏実父）からその漂流記を聴取した。漂流中の沈着な対処法、指導力、信頼性等に驚嘆した次第である。

注、六月下旬の操業時間は午後三時頃出漁、翌朝十時前後帰港。操業場所は、太平洋側は、鳥島列岩沖、占守島沖合数マイルからカムチャッカ半島ロバトカ岬沖合周辺、オホーツク海側は阿頼度島周辺から志林規島沖合周辺が主な漁場で、基地より二時間前後の航海時間で操業したものである。

六月上旬から七月中旬までは大時化で出漁出来ないという日は稀であるが、濃霧が深く航海は難航したものである。当時の独航船には、海図、羅針盤、バロメータ（晴雨計）の設備はあるが、無線、方向探知機、魚群探知機の配備はなく航海し漁労をおこなっていた。

○金田漁労長談

漂流の原因は、機関のバックボーンであるクランクシャフトの欠損。ロバッカ沖三〇マイル（約五〇キロ）海域で一週間位前から紅鮭が多

く獲れ始め、良好海域と認め出漁。投網して午前二時ころから網揚げを始め、白鮭、三〇〇尾位、紅鮭一〇〇尾位、銀鮭一〇〇尾位、鱒二〇〇尾位、合計七〇〇尾位を漁獲して帰路についた。

二、三〇分走ったところでエンジンが停止したので、機関長に「どうした」と声を掛けたところ、「シリンダーの中で鈍い音がして機械が停まった」とのことで、油差機関見習いや若者二、三人に手伝いをさせて調べたところ、クランクシャフトが折れ、航行不能とのことであった。

注、内燃機関焼玉エンジン、八十馬力、シリンダー二機

風もなく波もなく海面はおだやかであるが、濃霧が深く、マストに救助用にマネ（合図をするための旗など。）を揚げ、サイレン（警笛）を鳴らしたが、視界ゼロという有様で、他船の通過を待ったが附近を航行する船もなく一日を経過した。

食料は毎日帰る操業なので精々二日分位のもので、また、水も水槽タンクに半分位（満タンであれば一週間分位あるのだが）で、全員の飲料水以外に使用しないよう申し渡し、現状を説明、冷静に対処するよう指示した。

風が東寄り方向から吹けば占守島方面に流れるが、西方向からでは次第に太平洋の真ん中方面に流される状況であった。西寄りの風のときはシーアンカー（海錨）を流して一寸でも流されないようにして漂流していた。

三日目の夕刻、見張りに立っていた若い衆が、濃霧の中「左舷方向に船が見える」とのことで全員甲板に出たところ、海軍の駆逐艦であることがわかり全員でさけんだが、二〇〇メートル位近寄ったと思ったらそのまま並行して走り去った。警笛を鳴らしても無駄だった。手を振ったり、警笛を鳴らしたりしたことが歓迎でもしたものと思ったのだろう。なんぼ大声で呼んでも駆逐艦はエンジンがかかっており、大声の叫びも歓待行動と思ったのではないか。

若い衆の中には駆逐艦が遠ざかって行くのを見て「もう助からない」と泣き出す者もあった。気を引き締めるため、潮流、風向き、天候の状況から、船はそんなに流されていない。「濃霧が晴れたらどっかの船が必ず俺達を見つけてくれる。それまでみんなで頑張ろう」と言い渡した。内心、駆逐艦が離れて行ったときは「もう駄目か」と思った。

夜になって東寄りの弱い風がが吹き出したのでシートを帆代わりにマストに上げ、一寸でも島（占守島）に近づくように工夫した。

四日目は昼頃から西寄りの風が強く吹き、時化になったのでたくさんの物をつけてシーアンカーを流して島方向から遠ざかるのを防いだ。風が吹くと霧は晴れるので眼の利く若い衆をラット（操舵室）に上げ見張りをさせたが島影はもとより出漁している船は、夕方になっても見えなかった。

飲料水は不足がちになったためラットの上からダンブル（船倉）までテントを張って雨水を取った。雨の晩は交替でやった。米は少なくないのでニギリメシにし、海水で味付けし均等に配分するように、年輩の吉岡為作（新潟県、明治四十三年、三十二才）に指示した。米がなくなったら、「とった魚がたくさんあるから焼き、また火がなくなったら生でも喰うべ」と皆に力を付けた。

霧は若干晴れるが視界は依然として悪く五日頃から、なお西寄りの風が強くなったのでシーアンカーに流し網を一〇反程つけて漂流を続けた。

六日目の朝方、西寄りの風はやみ濃霧がかかり始めたが夕方になっ

たら東北寄りの風が吹き（風速一五メートル位）大時化となった。「時化でもいいシートの帆をあげれ。」と風一杯受ける状態とした。船足は二、三ノット位の速さが出ているように思われた。若い衆は「もっと吹け」「もっと吹いてけれ」とカッパを着て夜中じゅう甲板に出ていた。

七日目の朝になり風はまだ吹いており波も高いが、霧は晴れ視界は充分、相当遠方まで見える状態になったが、カムチャッカ半島も北千島の島々も見えるどころではなかった。この日ももう駄目と思っていたが夕方七時頃船首で見張りしていた若い衆が「船のような物が見えるぞ！」と叫んだ。その方向を見ると米粒大の浮遊物ではない、たしかに船だ。右舷斜前方に見え、二、三分するうちに「船だ」とはっきり分かるようになったので、船員室にいる全員に「助かったぞ！」と叫んだ。

船は次第に我が方に向かって大きく見始めて来た。乗組員全員肩をたたき合って生存している自分らの姿を確認し合って男泣きに泣いた。

（救助した船名、船長、所属名失念）

発見された海域はカムチャッカ半島ロパトカ岬より東北東一一〇海里（二〇三キロ）附近の太平洋上で、同独航船に曳航されて翌朝七時頃長崎に帰港した。

僚船乗組員、陸廻り全員元気な福運丸乗組員の姿を見て感慨無量で、筆者は特に金田漁労長に可愛がってもらっていたので一層生還を喜んだ一人である。

金田漁労長は漂流中の様々な出来事ひとつひとつが記憶にのこるが、駆逐艦が濃霧の中とは言いそばまで来て遠ざかって行ったこと。乗組員（十一人）が私（漁労長）の統制に従って持ち場を良く守ってくれたこと、そして一番感激したことは、救助してくれた船がそばまで来て警笛を鳴らし「みんな元気か」と叫んでくれたこと。「この漂流はわずか一週間であったが終生わすれない思い出になるだろう」と語ってくれた。

（昭和十七年七月十日（一九四二年）頃、占守島長崎、吉岡漁業部陸廻り番屋にて。）

注、シーアンカー（海錨……かいびょう）

船舶が荒天航行中、風浪が強大なために運航の自由を失って一時漂流して難をのがれる目的で船首または船尾から海中に投入する水中抵抗体をいう。長さ五〇メートル未満で、二〇〇総トン以下の船舶の漁船は属具として保有することが定められている。形状には別段定められていないが、従来から吹き流し型、多葉型、たこ型、梯子型円材、角材などの利用型などがあり、主として帆布を抵抗体とし、錨や浮標などを附属させたものである。近年は合成繊維の発達に伴い、取り扱いに便利で効果の大きいパラシュート型が開発されたのでほとんどが同型にかわっている。なお、漁業漂流用として潮帆（シオッポ）がある。

この漂流時には海錨に防舷用具（車のタイヤ）の他に流網を一〇反余を束ねて船首より流して風浪に船首を立てていた。

注、総トン……船舶の総トン数をいう場合、数詞の下に　添える語

総トン数……トン数の総計、船舶の全容積をトンの単位で表したもの。（一トンは一〇〇〇立方メートル）

数　詞……数量の量り、または順序を数えるのに用いる語。一、二、三あるいは二合、三升、四里などの基数詞と、一号、二番、三席、五等などの序数詞がある。これらを一品詞とみなす説もあるが、日本語では特別に扱う要はなく、名詞の中の一種とみるのが妥当である。

潮帆（しおっぽ）……船首から海中に投じて曳索により保持し船首を風向きに保ち船体が流れるのを防ぎ、海汐流とともに漂蕩し釣漁具での操業を容易にするために用いる漁業用の海錨の一種。
（水産百科事典、昭和四七年一月五日発行より）

七、僚船福運丸の曳航苦戦（切揚げ時）

太平洋戦争（大東亜戦争と呼称していた。）たけなわの昭和十七年（一九四二年）であり、北千島周辺にもアメリカの艦船（特に潜水艦）が出没したころであり、アリューシャンから北千島海域の戦雲かんばしからず。漁模様も七月中頃から下方線をたどり、七月二十日予定より早く切り揚げが決定した。

エンジン故障の福運丸のクランチシャフトは北千島に鉄工所はなく予備もなく、廃船になった同型焼き玉エンジン（クランク）を小型漁船から借用し、取り付けたところ、時速二、三ノットで航海可能となった。

二、三日近海（鳥島列岩周辺）に出漁に出たが、充分な漁獲は出来なかった。航海出来るといっても二、三ノットの速度では長距離単独航海は無理。特にオホーツク海にもアメリカ潜水艦の出没ありとの情報もあって、所属僚船による稚内港まで曳航することに決まった。

先航船は速力の若干速い第五長栄丸、中間船は第一長栄丸、後航船を福運丸として出航。速度を計算したところ六浬程度で航海可能との結果となり、七月二〇日午後三時頃、長崎を出航、幌筵島磐城崎から平田崎を交わして、阿頼渡富士を右舷に見ながら進んだが、六浬（二・一キロ）位の速力のため船足は思う様ではなかった。

福運丸もエンジンをかけ三浬程度の速力は出しているため先航船二隻も速力は通常速度で曳航し懸案であった走行トラブルもなく航海することが出来た。北千島志林規島から西南、樺太中知床岬に進路を取りオホーツク海を横断するコースを取ることとなった。

途中アメリカ軍の潜水艦等の攻撃をも警戒しつつ航海した。航海二日目の夕方、オホーツク海中間地点に来たころ北西風、二十五メートル前後の暴風雨に遭遇、午後八時ころ第一長栄丸と福運丸間の曳航索が切れ航行不能となった。

この頃、同航路を四五〇〇屯級の輸送船が後続して来て、見守るように見えたが、二、三十分で離れ先航して行った。多分時化を切り抜けられると判断したのだろう。この時こそ大型船を羨ましく思ったことはない。福運丸はエンジンはかかっているが激浪に翻弄されて沈没するのではないかと懸念されたが、同船船長（金田平治氏）始め乗組員の周到な対応、特にシーアンカーの対処法など懸命な操作で乗り切ることが出来た。

第一長栄丸、第五長栄丸は福運丸の風上に位置して長折り（長濤、波頭に白波を立て襲ってくる波）を警戒し波浪と戦った。午前三時頃、風はやや弱くなり、危険な状態は去った。それでもうねりは山の如く、僚船がうねりの間に入ると二分位見えなくなる程の大うねりであった。（うねり間隔一〇〇～一五〇メートル位であった。）夏海とはいい、嵐に慣れている経験深い乗組員も「こんな時化は操業中でも合ったことネナ」とぼやいていた。

風波は次第におさまり午前七時ころになり、うねりも小さくなったので曳航索を修理して航行を開始した。翌日なお、山（樺太）も見えない航海が続いた。オホーツク海の真ん中ではあるが、エンジンは順

調に回転しており、あの大時化を思えば二日や三日かかっても安心だ、と思いながら休息していた。

一日も暮れようとする夕方、西南方向の空が、夕陽が沈みくれないになりかけたころ、船首に立ってその方向を見ると雲でないと思われる物が水平線に見えるのでラット（舵）を取っているボースン（水夫長、横町小端六太郎氏、大正四年生、当時二八才）に「あれでないか」と指さしところ、凝視して「そんだナ、皆んな呼んでこい」と言うことで船員室に行き、誘って船首にでて「おそくてもあさっては稚内に着けるべ」と本道に近づいていることを喜び合った。

翌日、晴天で中知床の山並がはっきり見えたが中々近くにならないが、「もう大丈夫」とこの日も夕方になった頃、北海道側から、船影が見えて来ていた。近づくと、先航していた石狩港籍、吉田漁業部所属「第一昭宝丸」。後藤漁業部所属「第一白龍丸」が安否を気遣って迎えに来てくれて感激の涙で一杯となった。

迎えに来てくれた僚船は一日のばして待機「あの時化の中で故障の福運丸を引っ張っているからな。」と言うことで安否を気遣って「行ってみるか。」と出て来たという。何と有り難いことか。翌日午後稚内港に無事入港した。

稚内では福運丸のエンジン（焼玉無水式重油エンジン、八十馬力、木下鉄工所作成）、クランクシャフトが交換出来る状況にあり、漁労長、機関長他数名の作業員を残して、乗組員を各船（第一、第五長栄丸）に分乗して一日半の航海で無事石狩港についた。

八、風雲告げる占守島の周辺

1　千島探検開拓の足跡を忍び感涙

思い出に残ることは、めしたき作業の傍ら休日を利用して海軍基地である片岡湾を探訪した。約四キロの道程を歩んだが、忘れられないことは片岡湾丘上から見た湾内の光景である。

片岡湾は自然の要港と目されるところで海軍第五戦隊の集散基地で、アリューシャン列島まで守備範囲とし、常に十数隻の軍艦（巡洋艦、駆逐艦、海防艦、潜水艦）や輸送艦が寄港しており、その勇姿をみて北方海域は第一線にあるんだなと実感した。

いま一つは、片岡湾の陸に明治二十六年（一八九三年）予備海軍大尉、軍司成忠（ぐんしせいちゅう）が率いる報項效義会が探検開拓に入った有志二十余名の顕彰碑が建立されており、これを拝し、往時の開拓の苦労を偲び、手を合わせ感涙した。　資料五参照

注、①片岡湾などの由来

明治二十四年（一八九一年）明治天皇（宮内省）の勅語を得た、占守島踏査者、片岡利和侍従（じじゅう）（天皇のおそばに仕える役目の役人）を長とする調査隊が占守島、当時の湾名モヨップ湾に上陸したことから片岡湾と名付けられ、島内の長崎、小泊、沼尻、中川、及川、竹田浜など、その隊員名と聞く。

②根室市出身の作家寺島柾史氏は作品「宝庫千島」の中に「昭和十二年（一九三七年）幌筵、占守、阿頼渡を旅して、片岡湾頭、郡司ヶ丘の報效義会志士の墓標の前に額を突いた私は、双眼に涙をうかべて暫く低徊去るに忍びなかった。」云々と記している。

2　流し網操業中の独航船も潜水艦の襲撃を受け吹っ飛ぶ。

太平洋戦争も二年目に入り、アメリカ海軍の潜水艦など列島近海に出没しているとの報を受けますます北方海域も戦禍に追われることになって来た。

七月上旬のころである。所属漁業部、船名は失念したが、鳥島列岩沖数浬沖合で午後九時頃、流し網を投網し終わって振り掛かり（もやい網を引き休憩待機する。）していた時のことである。数浬離れた海域で、やはり網を流し終わって振り掛かりしていた船の方向で爆雷音がした。

薄暮の海面を透かして見たが、その付近にいた独航船の姿が見えないので操業中の船が救助に向かって見ると船舶の木片が浮いている位で何一つ見つからず、乗組員の姿もなく沈んだものと判断して、当該独航船は投網した流し網も放棄して帰港。即座に日本の駆逐艦がこの海域を掃海したが発見できず、三日間位太平洋側の出漁は停止されオホーツク海側、阿頼渡近海の漁に終始した。

その後、駆逐艦などで掃海が継続されたが、確認することが出来ないまま、列島海域で操業することになった。

注、昭和十七年（一九四二年）頃からは、北千島鮭鱒流網漁に出漁する独航船の一部に爆雷二個、潜水艦攻撃用として船尾左右に配備していた。撃沈された独航船は運悪く砲弾が爆雷を直撃したものと推定された。

北方における日本海軍は、北方海域の防備と北千島海区で操業する漁業関係機関（鮭鱒流網漁業、機船鱈延縄漁業、鱈一本釣り漁業、蟹刺網漁業、鮭鱒定置網漁業、雑魚底曳漁業、海藻採取業、缶詰業など）の警備に当たっていたことは事実である。資料六参照

3　不知火（しらぬい）の戦禍

片岡湾には大型軍艦の出入はないが、巡洋艦、駆逐艦、海防艦、潜水艦、大型の輸送船の海峡（幌筵海峡、幌筵島と占守島の間）通過は頻繁になって来ていた。

そんな七月の上旬、一隻の駆逐艦とおぼしき軍艦が、変な姿（後ろ向き）で巡洋艦らしき艦（ふね）に曳航されて海峡に入って来た。よく見ると艦橋から前部がなく、後部を先にバックで曳航されて来たものである。艦隊の戦いで艦首部分に負傷を受けたが、沈没をまぬかれたものか、「日本の軍艦も大したものだな」「あれだけ被害を受けても沈まないなんて」「それにしても相当な戦死者が出たのでないか」と勇戦を心強く思った。それが今日までその勇姿が脳裏に残っていた。

たまたま平成九年（一九九七年）八月、石狩郷土研究会顧問、田中実氏に話したところ「それは旧海軍駆逐艦、不知火だろう」と。そうして次の通り確認された。

注。駆逐艦　不知火

一等駆逐艦、　不知火、陽炎型（甲型）

資料七、参照

完成時要目……昭和十四年十二月二十日完成

① 二〇〇〇屯

② 三十五ノット（一ノット一八五二メートル・六四キロ時）

③ 十八ノットの速度で五〇〇〇走航可

④ 一二・七センチ砲六門、二五ミリ機銃四挺、六一センチ魚雷発射管八問

昭和十九年十月二十七日米空母機の攻撃を受け、バナイ島北方水域（シブヤン海）にて沈没。

（「写真集連合艦隊」朝日ソノラマ　昭和六十一年　参照）

○戦禍の状況

昭和十七年七月五日、第十八駆逐隊の駆逐艦、三隻はキスカ港外でアメリカ潜水艦の攻撃を受け、霰（あられ）は沈没。不知火は損傷の大被害を受けた。損傷艦二隻は後に曳航され内地に帰った。筆者が当該損傷駆逐艦を漁業基地長崎で見たのは、鳥島列岩方向から幌筵海峡（パラムシロ水道）を曳航されて、片岡湾海軍基地に帰還した勇姿であったと推認する。

「写真図説帝国連合艦隊日本海事一〇〇年史」　講談社　昭和四十五年　資料七、参照

注、筆者が乗船し、占守島に向かった独航船は、吉岡漁業部所属、第五長栄丸二三・八五屯、機関、無注水重油焼玉エンジン、七十五馬力、三気筒、速度十二ノット（二十二キロ）巡航速度十一ノット（二十キロ）の機帆船であっった。

その後、輸送等の損傷船舶の入港など散見されたが、軍艦の海峡通過を見る限り、北方海域は強い海軍に守備され万全であることを自負し、意を強くして増産に励んだものである。

注、昭和十八年五月、アリューシャン列島アッツ島、陸軍守備隊玉砕

前年から千島列島海域へのアメリカ海軍潜水艦の出没で出漁漁船にも被害が出るようになり、全船ではないが独航船は武装化され、後部（船尾）左右に爆雷各一個、操舵室上に囲いを作り、軽機関銃一丁、漁船員二人に一丁宛（五丁）小銃が装備されて出漁したと聞く。

この年の七月下旬、片岡湾に基地のある吉岡漁業部第五長栄丸は乗組員の兄が、幌筵島相原に原隊を持つ陸軍部隊に配属されており、その慰問のため柏原港に仮泊していた時、折りからアメリカ軍グラマン機の空襲を受け銃撃により、同船、大河原機関長他一名戦没した。

戦争は北方海域でも潜水艦の出没、航空機による空襲、ますます激化して来ていた。

九、めしたき物語余話

北千島海域の戦雲急を告げつつある昭和十七年（一九四二年）操業もままならず、例年であれば八月末日が切り揚げになるのであるが、この年は七月二十日、漁も減少しつつあり、各船団（日魯、太平洋漁業株式会社）の切り揚げも早まり母港に帰港することになった。

僅か二ヶ月余の離郷であったが、懐かしさが人一倍で、時化もすぎてもう大丈夫となると、食い気が一番に脳裏を掠める。「稚内港に入ったら何をしようか?」まず「風呂にはいる」それから「腹一杯サイダーを呑む」これを実行すること。

岸壁に着き、舫（もやい）をして、エンジンを停止し、漁労長（故、吉岡芳美氏）から上陸許可が出て、風呂屋の位置もわからないまま走る。漸く見つけて風呂に入る。満足して表に出た。灯火管制で暗い街中を雑貨屋をさがして入る。戦時下で飲食物の大方は統制であったがサイダーは品不足とは云え、何とかあり店主の小父さんに注文するとすぐ出してくれた。一本一気にラッパ飲み「アー甘い、もう一本」と注文すると、変な顔をしながらも、また一本だしてくれた。これもすかさずラッパ飲み、「ゲップ、ゲップ」と口を拭いていると、あきれ顔の小父さ

んは「あんちゃん、どっから来た。随分うまそうにサイダーを呑んでいるが」とのこと。「今、北千島の鮭鱒流しから帰って、港に入ったばかりです」と答えると「そうか、大漁してきたか。あんまり旨そうに呑むんで気に入った。もう一本のめや。やるから」と注文しないのに無償で一本呑ましてくれた。

合計三本を一度に呑みゲップをしながら船に帰った。翌日出港は夕方とのことで、「冷たいものが食べたい」と思って喫茶店に行き、戦時代用食のみつ豆二、三杯注文し、結果一三杯食べて店員にあきれられた。

平成二年、仕事の関係で稚内市に行くことになり、当時を思い出し雑貨店と喫茶店を捜したが（北門神社の鳥居左がわの附近）該当店はすでに転居、稚内には居住してないことがわかった。船が着いた岸壁は埋めたてられ、全日空ホテルやフェリーターミナルの岸壁となっていた。なにしろ五十年後のことだ。

それでも、北防波堤ドーム（しおさいプロムナード）は、当時稚泊航路の船着き場で改築されてはいるが、微かにその余波（なごり）を留めていた。

稚内港からの航海は名の通り独航で、曇り空であるがベタ凪（風もなく波の立たない様）右舷に名山、利尻富士（一七二一メートル）を仰ぎ見ながら、天売焼尻島を夕闇に映えて、雄冬岬灯台にむかえられて正午頃石狩港に入港した。

帰省、航海中、陸廻りの責任者から「切り揚げ近くになりご飯の炊き方も、味噌汁の作り方も度に入り巧くなったな。良い機関長になれるぞ」と言われ意を強くした。

注、この年の一月石狩漁業組合が主催した講習会で沿岸発動機関丙種海技免状を取得していた。この頃の本町地区を始め沿岸地区（厚田村、浜益村）の若者は、船乗りになろうとするものは、北前船の時代と同じように「めしたき（かしき）」からはじまると言われた時代で、この頃の独航船の漁労長、船長、機関長も「めしたき」を経験し、海技免状（違法のない限り生涯有効である。）を取得しそれぞれの立場で操船したものである。

― おわりに ―

今日では幻となった北千島諸島を基地とした鮭鱒流網漁業は、千島列島全域がロシア国（旧ソ連）の領有するところとなって再開されることはない。記述した内容は、一仕納（ひとしのう）（一つの期間）短期間で、漁労見習いの「めしたき」の経験を自分史的に記憶をたどり先達者の力を借りて書きおろしたもので文中に相違点などありましたらご教示戴ければ幸甚です。

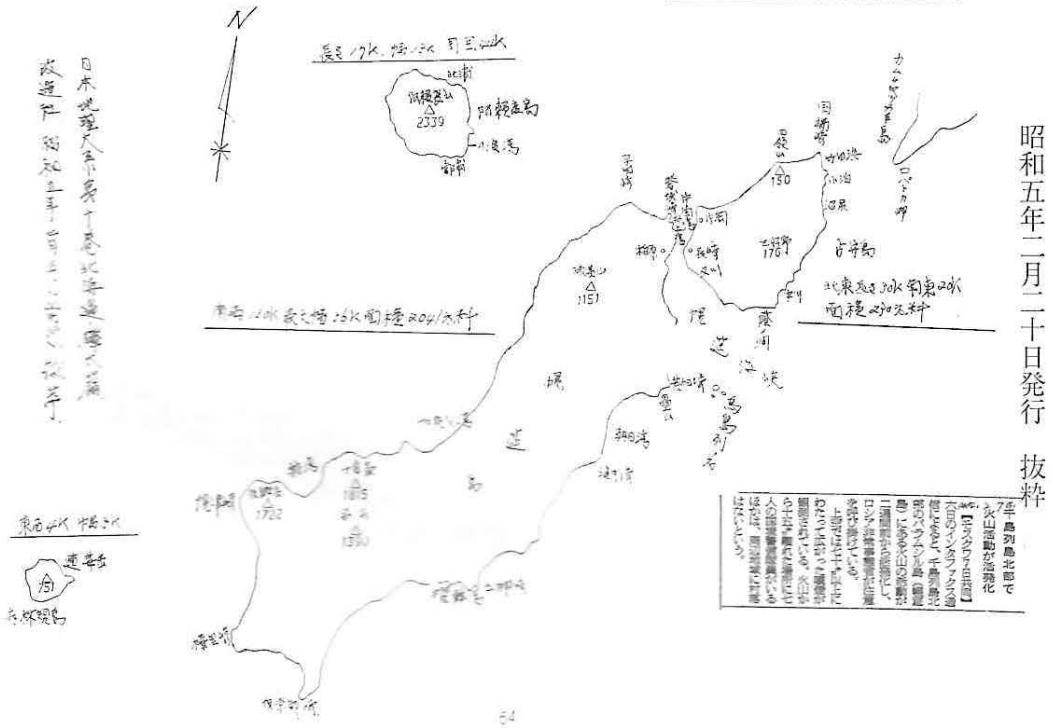
参考文献

○北千島（阿頼渡島、幌筵島）の遠征報告
一九九一年（平成三年）四月、ＨＵＳＹ北千島スキー登山隊、
編者　石塚吉浩
○日本地理大系第十巻北海道樺太編
昭和五年二月二十日、改造社
○写真図説帝国連合艦隊　日本海軍一〇〇年史
一九六九年　講談社

○写真集連合艦隊
昭和六一年　著者　堀元美　日本制作センター
○昭和一七年五月一八日　吉岡漁業部（船主　吉岡三之助）鮭鱒流
網漁乗組員生命保険会社提出資料　石狩市　田中實氏所蔵
○独航三千浬北千島の流網物語
平成六年十二月二十日　著者　金田方夫　自家本
○北千島漁業根拠地一覧図　抜粋
昭和十年七月一日現在　函館市富岡町　北千島水産会作成
石狩市　金田万夫氏所蔵
○水産百科事典　海文堂　昭和四七年二月十五日初版　編者　水産
百科事典編集委員会

附図
北千島四島一列岩概要図
日本地理体系第十巻北海道樺太編　改造社
昭和五年二月二十日発行　抜粋

北千島４島１列岩概要図



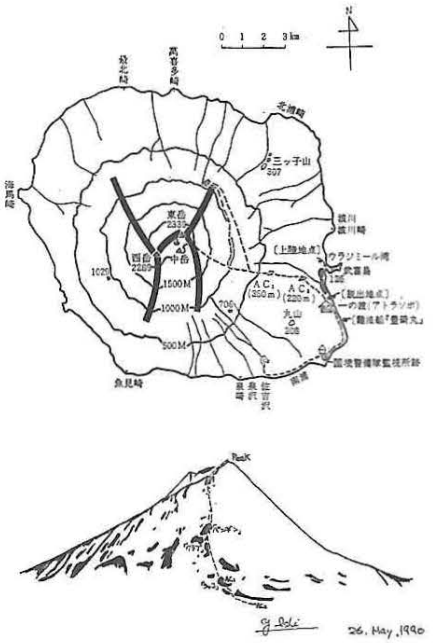
資料一

千島列島

根室半島～カムチャッカ半島　約1,090 km

資料二

阿頼度島概要図



資料三

第一長栄丸乗組員

職名	氏名	生年月日	住所
船長	石黒石松	明治二九年八月十五日	石狩郡石狩町大字横町北十八番地
漁労長	大河原幸次郎	明治四十四年十一月二十日	石狩郡石狩町大字親船町南二番地
機関士	長谷川民之助	大正七年二月二十一日	石狩郡石狩町大字横町南十七番地
水夫長	有田三郎	大正十三年三月十日	新潟県北蒲原郡南浜村大字島見浜
油差	中村甚三郎	明治四十一年四月十九日	浜益郡浜益村大字尻苗村濃昼村
乗組員	飛内政雄	大正十四年十一月二〇日	〃
	坂口正美	大正二年三月二十一日	〃
	有馬繁美	大正十年一月三十日	〃
	佐々木源三郎	大正八年三月十日	石狩郡石狩町大字親船町南二五番地
	久米達也	大正十五年十二月九日	浜益郡浜益村尻苗村濃昼村
	中村義賓	大正十三年十二月二十三日	〃
	中野繁雄	大正十三年八月六日	〃

第五長栄丸乗組員

職名	氏名	生年月日	住所
船長	吉岡芳美	明治四十三年九月五日	石狩郡石狩町大字舟場町十三番地
漁労長	岩本栄作	明治四十五年九月五日	〃　大字新町二番地
機関士	小嶋六太郎	大正四年十月六日	石狩郡石狩町大字横町南十八番地
水夫長	有田助次郎	大正十一年八月十七日	新潟県北蒲原郡南浜村島見浜
油差	吉岡義春	大正八年	石狩郡石狩町大字横町南二十番地
乗組員	宮下梅次郎	大正八年六月二十日	〃　南十八番地
	加賀田梅四郎	大正六年一月二十二日	新潟県北蒲原郡南浜村島見浜
	大星八次郎	大正十一年二月五日	〃
	藤井三四郎	明治三十九年十月二十五日	〃
	山田竹雄	大正十五年一月三十日	〃
	木戸七郎	大正三年十一月二十四日	浜益郡浜益村大字尻苗濃昼村
	佐藤久喜	大正十三年六月三十日	〃

福運丸乗組員

職名	氏名	生年月日	住所
船長	金田平治	明治十四年一月十五日	石狩郡石狩町大字弁天町南二一番地
漁労長			
機関士			
水夫長	渡辺権三郎	明治四十四年九月十三日	新潟県北蒲原郡南浜村島見浜
油差			
乗組員	伊藤左七	大正二年三月四日	新潟県北蒲原郡南浜村島見浜
	吉岡為作	明治四十三年十一月十一日	〃
	平松銀蔵	大正十四年八月十四日	〃
乗組員	金田源之十	大正二年七月四日	新潟県北蒲原郡南浜村島見浜
	南吉松	大正二年七月四日	〃〃
	本間清治	大正八年十一月十五日	石狩郡石狩町大字親船町北十二番地
	高橋留太郎	大正十一年一月二九日	〃 大字横町南二十一番地
	干場正光	大正十二年十一月三十一日	浜益郡浜益村大字尻苗村濃昼村

陸廻り員

職名	氏名	生年月日	住所
	吉岡松太郎	明治三五年四月三日	石狩郡石狩町大字弁天町南十九番地
	有田助作	明治二八年五月三日	新潟県北蒲原郡南浜村島見浜
	吉岡平五郎	明治三二年一月二六日	〃
	加賀田次郎造	明治三六年十一月二七日	石狩郡石狩町大字横町南十七番地
	阿部孝太郎	明治四四年三月二五日	〃 大字横町南一六番地
	飛内正一	明治二八年九月二五日	浜益郡浜益村大字尻苗村濃昼村
陸廻り員	坂上久四郎	明治三十年十二月二十日	石狩郡石狩町大字横町南二十一番地
以上	吉岡玉吉	大正十五年三月十二日	石狩郡石狩町大字弁天町北三十一番地

注　吉岡漁業部において出漁時乗組員の生命保険会社に提出した所有三隻の（福運丸は小樽からの借用船）乗組員名簿の抜粋である。

石狩郷土研究会顧問　田中實調べ

資料四

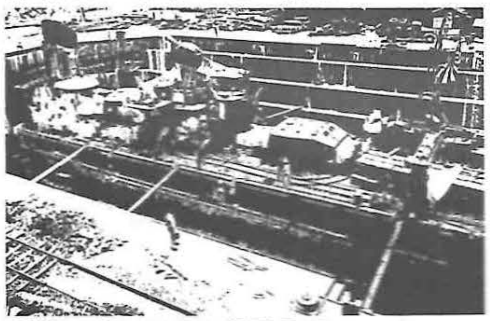
阿頼度富士（2,339m）

・志林規氏、幌筵島側から撮した阿頼度富士。
・学生作戦要務で昭和17年この大海を進みながら北千島及び南樺太地域に向った。
・撮影年月日 10月末頃 北千島遮蔽隊がセベロ・クリリスク（幌筵島柏原）から陸上で撮影した阿頼度島。
撮影者 阿部新雄（隊長）

資料五

駆逐艦　不　知　火

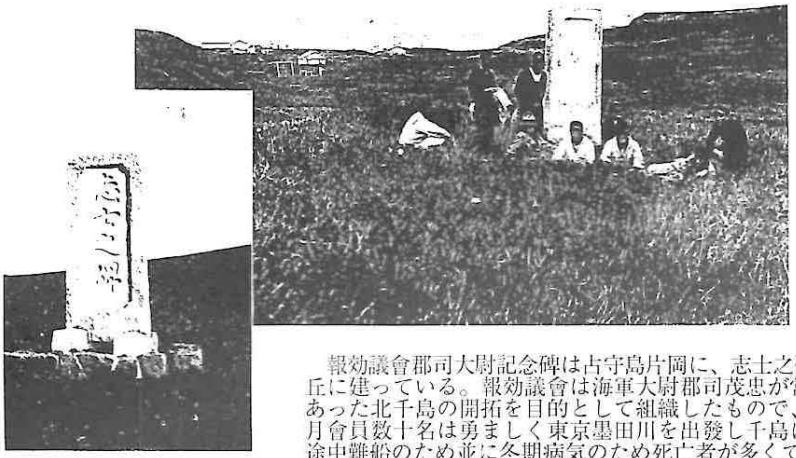
駆逐艦不知火　昭和17年（1942年）7月5日　第18駆逐隊の駆逐艦3隻はキスカ沖外でアメリカ潜水艦の攻撃を受け　霞は沈没　不知火および霰は損傷の大被害を受けた　損傷艦2隻は　後に曳航されて内地に帰った



修理中の不知火　本艦は　キスカで損傷して応急修理の間　霞橋から前部を切断して後ろ向きで曳航され豊潮に帰った　写真はその直後のもの　ドックに入ったところ

資料六

郡司大尉記念碑と志士之碑



報効議會郡司大尉記念碑は占守島片岡に、志士之碑は同處郡司ヶ丘に建っている。報効議會は海軍大尉郡司茂忠が常時無人の境であった北千島の開拓を目的として組織したもので、明治二六年三月會員数十名は勇ましく東京墨田川を出發し千島に渡航したが、途中難船のため並に冬期病気のため死亡者が多くて大に困難した。同年片岡には郡司他六名越年し二十九年六十余名移住した。乃ち事務所住宅倉庫等十餘棟を建て同處を本部とし占守幌筵漁場の開發及び遠洋鱈漁業等に従事したが事業意の如くならず、三十九年瓦解して数十名退去した。志士の雄略挫折して今や空しく此碑を存す。観る者亦涙なきを得ず。片岡はアイヌ稱チポイネ・笈稱モヨロツプ、明治二十五年片岡侍従の姓を採りて敬稱した。幌筵海峡い臨める良港である。（河野常吉）

昭和十一年七月一日現在北千島漁業根拠地一覧図抜粋

業種	各符号	着業数 業種	着業数 兼業
機船鱈延縄漁業	タラ釣	七六隻	
川崎船鱈延縄漁業	タラ釣	六隻	
鱈一本釣漁業	タラ釣	四〇隻	三六隻
鱈底建網漁業	底建	一（二四隻）	
鮭鱒流網漁業		一九五隻	五隻
鮭鱒延縄漁業	鱒縄	一七隻	一隻
蟹刺網漁業	カニ	一三隻	
定置漁業		三六統	
海藻採取業	採藻	二〇ヶ所	二〇ヶ所
缶詰製造業	鮭鱒工場 蟹工場 鯨工場	一三工場 二四ライン	一三工場
合計 沖合漁業	三五八隻	海藻採取業	
合計 定置漁業	三六統	缶詰工場	

流網漁船ハ多数ニシテ且ツ陸上ニ根拠地ヲ有セザルモノ多キヲ以ツテ図表に記入セズ

北千島水産会　函館市富岡町

石狩市花川在住

金田方夫代所蔵

いしかり暦　第十九号

平成十八年二月二八日　印刷
平成十八年二月二八日　発行
発行者　石狩市郷土研究会
石狩市花川南五条二丁目一三一
村山耀一方
TEL〇一三三―七二―七四八九